

# 構成的存在論：普遍者の束理論と基体説の現在地\*

横路佳幸・大畑浩志

## 概要

In general, there are two major and representative metaphysical views classified as constitutive ontology according to which every particular object has abstract properties as their constituents in some sense. One is the bundle theory of universals, which argues that every particular object is merely a bundle whose constituents are universals. The other is the substratum theory, which argues that the constituents include not only universals but also substratum. The purpose of this paper is to review and evaluate recent developments in the bundle theory of universals and substratum theory. In Section 1 we sketch out what constitutive ontology is like in contrast to relational ontology by focusing on the instantiation relation obtaining between objects and properties. In Section 2 we address two questions posed to constituent ontology in general, one based on a category mistake and the other using the definition of composition, and see how it is possible to respond to them. After an outline of the basics of the bundle theory and substratum theory in Section 3, Section 4 examines some recent bundle theories including the instance view, the mereological bundle theory, and the view that resorts to weak discernibility in terms of Black's universe. Then, in Section 5, by focusing on the question of whether substratum instantiates universals, we examine recent substratum theories, especially the view that posits two kinds of property instantiation and the view that identifies substratum as a particular object or spacetime region. Through these discussions, we consider the current ontological/ideological depth of constituent ontology.

Keywords: Constituent Ontology, Relational Ontology, Bundle Theory, Substratum Theory

## 序

いま、あなたの目の前にひとつの大きな木があるのだとしよう。この木は、当然のことながら様々な部分から成る。数多くの葉とそれを付けた細い枝、太い幹などである。他に植物細胞やセルロース、より微小な粒子などもこの部分のリストに含めてよいだろう。このリストを網羅的なものにするには、木が持っている物質上の部分を大きいものから小さいものまですべて列挙するだけで十分である——少なくともそのように考えることは理論化以前の直観または常識と言える。しかし驚くべき

---

\* CAP Vol. 13 (2022) pp. 197-232. 受理日: 2021.09.12 採用日: 2022.03.11 採用カテゴリ: サーヴェイ論文 掲載日: 2022.04.04

ことに、一部の形而上学者はこの描像に反旗を翻し、問題の木は物質上の部分以外にも数多くの「部分」を持っていると論じてきた。その部分とは、「木である」や「緑色である」、「独特の香りを放つ」などをはじめとする性質という構成要素である。

一般に、木や人などの具体的な個物が、物質上の部分以外に、抽象的な性質を部分または構成要素として持っている主張する立場は、構成的存在論 (constituent ontology) と呼ばれる。本稿の目的は、この構成的存在論に着目し、その下に置かれることの多い普遍者の束理論 (bundle theory of universals) と基体説 (substratum theory) のこんにちの発展を見渡すことを通じて、個物と性質をめぐる形而上学の現在地を見定めることである。特に両理論は近年、多様な概念ツールを補助線として、従来の枠組みを超え新たな展開を迎えているように見える。この躍進を追うことにより、構成的存在論を代表する二つの見解は——理論化以前の直観や常識と著しく対立するように見えるにもかかわらず——実際には思想的に豊かな奥行きを持っており、さらにその他の形而上学的トピックとも特筆すべき点で重なり合う見解であることが明らかとなるだろう。

本稿の筋書きはこうである。まず第1節では、関係的存在論 (relational ontology) との対比から構成的存在論がどのような理論であるかを素描する。次に第2節では、構成的存在論に投げかけられる二つの疑問にどのように応答可能であるかを確認する。続いて第3節では、普遍者の束理論と基体説の基本事項を確認する。第4節と第5節では、束理論と基体説それぞれの近年の動向を概観し検討することで、構成的存在論内部の論争がどのような広がりを持っているかを見る。最後に第6節では、それまでの議論のまとめとして、束理論と基体説の新展開全体に簡潔な評価を加える。

## 1 構成的存在論——その主張と背景

本節では、構成的存在論がいかなる主張を行い、どのような背景を持つ立場であるかを関係的存在論との対比を通じて明らかにする。だがその前に、用語の取り決めをしておこう。本稿全体で我々は、「個物 (particular object)」と「性質 (property)」、「例化 (instantiation)」を次の比較的ニュートラルなものとして導入する。すなわち、個物とはそれ自体はけっして例化されえない具体的なもので、典型的には冒頭の木や個々のリングなどが当てはまるとする。これと対照的に、性質とは（主に個物によって）例化されうる抽象的なもので、典型的には木であることやリングであること、赤さなどが当てはまるとする。そして個物  $x$  が性質  $P$  を例化するとは、 $x$  が  $P$  を「持つ」あるいは  $x$  が  $P$  によって特徴づけられることを意味するとみなす。たとえば、いま目の前にあるリングは、それ自体は他のものによって例化されない具体的な個物である一方で、リングであることや赤さなどの複数の抽象的な性質を例化しそれらによって特徴づけられている。

構成的存在論と関係的存在論は、この個物と性質の関係性をめぐって衝突する競合理論である\*<sup>1</sup>。より具体的には、両者の分水嶺は次の形而上学上の問いにある。

\*<sup>1</sup> 「構成的存在論」の命名は、Wolterstorff 1970 に由来する。現在この名称が浸透している背景には、Loux 2006; van Inwagen 2011 の影響が大きい。なお、構成的存在論と関係的存在論の対立は、大枠としてはアームストロングが命名した「多層ケーキ理論」と「塊理論」の対立に重なる (Armstrong 1989: 38, 邦訳 74)。

- (1) 個物  $x$  が性質  $P$  を例化するとはどのようなことか。つまり、 $P$  が  $x$  によって例化されるところの  $P$  であるということは、どのような事態によって形而上学的に基礎づけられ、また  $x$  と  $P$  の間の関係はどのようなになっているのか。

冒頭で見たように、構成的存在論は (1) に対し「部分」を用いて応答する。ここで言われる「部分」は、通常物質上の部分の代わりに抽象的な性質に特化したものとして、よりテクニカルには「構成要素 (constituent)」と言い換えられる。つまり、個物  $x$  がある性質を例化することは、 $x$  がその性質を構成要素とするような「全体」であることによって形而上学的に説明される。また、 $x$  がある性質を構成要素として持つとき、その性質は  $x$  から離れてはおらず、むしろ  $x$  の時空領域を占めるという意味で  $x$  に内属する (immanent) と言われる。よって、(1) に対し構成的存在論は次のような主張を行うことになる。

- (2) 個物  $x$  が性質  $P$  を例化するのは、 $x$  が  $P$  を構成要素とするおかげである。 $x$  と  $P$  は構成要素と全体間に成立する (通常物質上の部分関係とは異なる意味での) 構成要素関係にあり、 $P$  は  $x$  に内属する。

このとき、性質という「構成要素」なしには個物という「全体」はありえず、構成要素は全体に対し形而上学的に先行している。また、性質がそれを例化する個物に内属しその「内にある (in)」と言われるとき、構成要素としての性質という考えは、日常的な物質上の部分という「部分」と性質という「部分」を適切に区別することに立脚している。個々の物質上の部分が何らかの性質を持ちうるのだとすると、それは物質上の部分が構成要素として持っている性質のおかげである。つまり、個物という全体あるいはその物質上の諸部分は、その構成要素であるところの性質に形而上学的に先行されていることになる。

これに対し関係的存在論は、「部分」を用いた応答を斥ける。個物が持つ「部分」は物質上のものに限られ、抽象的な性質は個物の「構成要素」ではありえない。個物  $x$  がある性質を例化するとき、その性質は  $x$  の内にあるわけではなく、むしろ  $x$  が占める時空領域から離れてあるという意味で非内属的で超越的な (transcendent) 存在者である。個物と性質はそこでは、「部分」とは無縁の非構成的な例化関係——支持者のひとりオルソンの表現ではそれは「抽象的で血の通っていない (bloodless) 関係」(Olson 2017: 63) ——によって結び結ばれている。もしくは、こうした非構成的な関係を新たに措定するのではなく、個物による性質の例化とはいかなる形而上学的説明も不要の基礎的な (fundamental) 事態だと捉える立場もまた、関係的存在論の一種に含めてよいかもしれない。この場合、個物による性質の例化に対する説明は因果もしくは物質上の構造を用いた説明だけで十分であり、(1) のように形而上学的な説明・基礎づけを求めるのは「無意味」となる (van Inwagen 2017: 347)。しかしどちらの場合であっても、構成的存在論と対置される関係的存在論にとって、個物とは性質という構成要素をいっさい持たないという意味で「塊 (blob)」(Armstrong 1989: 76, 邦訳 173) のようなもので、その主張は次の (3) によって特徴づけられる。

- (3) 個物  $x$  が性質  $P$  を例化するのは、 $x$  が  $P$  を非内属的に持つおかげである (もしくは、 $x$  による  $P$  の例化はいかなる事態にも基礎づけられない説明不要の事態である)。 $x$  と  $P$  は構

成要素関係にはなく、 $P$  は超越的な存在者として  $x$  から離れてある。

構成的存在論の是非や分類に照準を合わせる前に、両理論の歴史および理論的背景に簡単に触れておくことは有意義だと思われる。まず、構成的存在論と関係的存在論の対比は、古くはアリストテレス的存在論とプラトンの存在論の相違に起源を持つ。大掴みで説明すると、前者の存在論では「部分」とは本来多義的であり、個物は通常物質上の部分といわゆる形而上学的部分の少なくとも二種類の「部分」を持つと考えられる。これに対し後者の存在論では、性質は超越的なアイデアと捉えられ、性質と個物の結び付きはアイデアといわばその似像の関係として理解される。とりわけ、性質が個物の「内にある」か否かという論点は、アリストテレスとプラトンの間で争われた主要な係争点のひとつ（として解釈可能）であり<sup>\*2</sup>、構成的存在論と関係的存在論の源流が古代ギリシア哲学にあると考えるのは比較的自然である<sup>\*3</sup>。

時代を現代まで進めると、構成的存在論と関係的存在論の違いは目下のところ、単に立場上の対立に留まらない。その違いは、取り上げられるトピックや主要な問題意識の不一致にまで及んでいる (Olson 2017: 63–4)。一方の構成的存在論に立つ者の多くはこれまで、先の (1) の問いを深刻に受け止めた上で、各個物とその構成要素たる性質からどのような仕方で統一され、また構成要素を完全に共有する二つの個物がどのような根拠のもとで個別化されるかなどを問うてきた。後述する不可識別者同一の原理や基体の有無といった形而上学的主題が花咲くのは、もっぱら構成的存在論が有望なオプションとして受け入れられている場合である。他方で関係的存在論に立つ者は、性質と個物の関係をそれほど問題視しない代わりに、個物とその物質上の部分の間のメレオロジー的关系に焦点を当てる傾向にある。複数の諸部分がいかなるときに全体を組成するかを問う特殊組成問題や、ダビデ像とその材料である大理石の塊が数的に区別されながらも時空上で一致しうるかを問う一致のパラドクスが盛んに議論されてきたのは、主に関係的存在論に分類される哲学者の間においてだと言える。もちろん、構成的存在論と関係的存在論における問題意識の相違は、あくまでも各理論の支持者が持つ傾向を大雑把に対比させたものにすぎない<sup>\*4</sup>。しかし、個物と性質について根本的に異なる形而上学的描像を出発点とするために、両理論が十分な対話や共通項を欠いたまま互いに独立した仕方で——あるいは派閥的な様相を呈した形で——議論を展開してきたことは多くの者が納得するはずである。

<sup>\*2</sup> この係争点は、中世哲学に至っても引き継がれ、アンセルムスに代表される「個物に先立つ普遍者 (universalia ante rem)」と、トマス・アクィナスに代表される「個物の内にある普遍者 (universalia in rebus)」という二つの異なる潮流へと発展していくことになる。ただし、中世の哲学者たちが普遍の問題を論じる際には、本質と偶有性を厳密に区別するアリストテレス的な前提を広く共有していたことは注記しておくべきだろう (Galluzzo 2008)。

<sup>\*3</sup> もちろん、構成的存在論は徹頭徹尾アリストテレス的でなければならないというわけではなく、同様のことは関係的存在論とプラトンの存在論の関係にも当てはまる。たとえば、プラトンとアリストテレスの間で議論されたその他の論点には、例化されない性質は存在するかという疑問がある（と解釈可能である）。これにプラトンは肯定的に答えたのに対しアリストテレスは否定的な態度をとったと考えられるが、関係的存在論がアリストテレスに接近し、「性質はすべて例化されるものでなければならない」と考える立場に与することは理論上妨げられない (van Inwagen 2011: 404; Loux 2015: 41)。さらに言えば、構成的存在論と例化されない性質の両立を図る論者も少なからず存在する (Moreland 2013; Peacock 2016)。それゆえ関係的存在論と構成的存在論の対立は、プラトンとアリストテレスの違いとびたりと重なる必要はない（ただし、関係的存在論で超越的な性質が措定される際、例化されない性質の存在が根拠として挙げられる傾向にあるのは事実である）。

<sup>\*4</sup> そうした傾向から逸脱する例として、ポールやコスリキといった哲学者は、構成的存在論に与しながらも、一致のパラドクスについて積極的に論じている (Paul 2002; Koslicki 2018)。特にポールの立場については、第 4.4 節で触れる。

## 2 構成的存在論に対する二つの批判と応答

一見したところ、個物の形而上学的なあり様をその形而上学的な部分、すなわち構成要素を用いて説明するのは——構成要素の存在それ自体の反直観性を度外視すれば——それほど無理のない考えのように見える。これはちょうど、事物の物質上のあり様をその物質上の部分を用いて説明するのと類比的である。コップに注がれた水がいまでも熱を帯びているのは、それが熱運動する水分子を部分として持つからである。同様に、個物による性質例化という形而上学的な事態は、問題の性質が当の個物の構成要素となることによって説明することができる。先に見た関係的存在論は、個物と性質がどのように結び付くかという問題に対し、それを原初的にしておくか、もしくは構成要素関係以外の謎めいた関係を持ち出すことでしか取り組むことができない。これに対し構成的存在論は、構成要素関係に頼ることにより、物質上の部分関係と平行でわかりやすい説明を与えることができる。一般に、この世界で実際に生じている事態に説明を与え、原初的な事実の数を最小限に抑えることは、形而上学で認められる利点のひとつである。だとすると構成的存在論は、この利点を享受する点で関係的存在論よりも優れた視座を提供していると言えよう。

しかし、残念ながら構成的存在論は——その長い歴史や背景にもかかわらず——残念ながら現在の分析形而上学において多くの支持を集めるには至っていない。この「不人気」の実態はけっして理由なきことではなく、さらに言えばそれは単に常識や直観と衝突するという素朴な理由だけによるものでもない。そこで本節では、これまでに提起されてきた二つの批判とそれに対するありうる応答を確認することで、構成的存在論がけっして不合理ではなく十分に理解可能なものであることを先に明らかにしておきたい。

### 2.1 カテゴリーミステイクに基づく批判

第一に検討すべきは、構成的存在論がカテゴリーミステイクに陥っているのではないかという疑念である。構成要素としてどのようなものを想定するのであれ、具体物である個物が抽象物である普遍者を構成要素とすることは本当に可能なのだろうか。ほとんどの哲学者は、具体物と抽象物の存在論的カテゴリーを明確に区別する。この区別を踏まえると、普遍者が個物の部分となるという考えは二つのまったく異なるカテゴリーを混同しており、構成的存在論は具体物に対して抽象物を誤って帰属させているのではないか。

この批判は一見すると説得的である。しかし、具体物と抽象物を明確に区別できるものとして措定している時点でやや問題含みである (Loux 2015: 10–1)。両者を区別する基準とは何だろうか。時空的位置を占めるか否かだろうか。そうすると実体二元論における精神 (心) という実体は、「延長」によって特徴づけられず、まったく時空的位置を持たないがゆえに具体物ではないことになってしまう——しかし、実体二元論者はかならずしもあなたを抽象的な実体とみなすわけではない。これにくわえて構成的存在論者は、普遍者が時空的位置を持つことを積極的に認める。普遍者は、それを例化する個物に内属する構成要素であるため、当の個物が占める特定の時空的位置を余すところなく占める

ことになる。たとえば、二つのトマトによって例化される赤いという普遍者は、問題のトマトが占めている各時空的位置を同時に余すところなく占めることができるような存在者である。この事態はちょうど、かつてルイスが示唆した「集合はその元がある場所を占める」という考えと一部で類比性を持つ (Lewis 1986: 83, 邦訳 91)。具体物であるリンゴ  $a$  と  $b$  から成る抽象的な集合  $\{a, b\}$  は、(部分的には)  $a$  の位置を占め、(部分的には)  $b$  の位置をも占める——このような考えを妨げるものは何もない。したがって、具体物と抽象物を明確に区別する基準として時空的位置は不十分であり、その他の基準もまた満足いくものではないだろう。

さらに言えば、存在論的カテゴリーを首尾よく区別できたとしても、異なるカテゴリーに属する事物間に「部分関係」または「構成要素関係」が成立することは、実際にはそれほど珍しいことではない。たとえば、ソクラテスという具体物と  $\{\text{ソクラテス}\}$  という抽象物 (単集合) の間に元と集合の関係が成立するとき、ソクラテスは広い意味で  $\{\text{ソクラテス}\}$  の「部分」と述べてもよいように見える (Fine 2010: 563–4)。また、「エッフェル塔より高い」といういわゆる不純な (impure) 性質が存在するのだとすると、その抽象物はエッフェル塔という具体的な個物を「構成要素」として含んでいると考えられる (Moreland 2000: 46)。さらに、具体物としての出来事についていわゆる性質例化説に立つとき、出来事とは個物がある時点で性質を持つ具体物にほかならないことになるため、その「構成要素」には性質という抽象物が何らかの意味で含まれていることを認めねばならない。いずれのケースから見ても、具体的なものと抽象的なもの間に何らかの意味で部分関係が成立することは、ありえないどころかむしろ我々の身近にあふれている。したがって、個物と普遍者の間に部分関係を認める構成的存在論の主張は、抽象物と具体物という存在論的カテゴリーの無自覚な混同に基づくわけではないことがわかる。

## 2.2 オルソンの批判

第二の疑問として、構成的存在論は受け入れがたい帰結を導くように見えるかもしれない。近年この問題を提起したオルソンは、次のように再構成可能な論証によって構成的存在論を批判した (Olson 2017: 72–4)。いま、ある人間 (オルソン自身) を  $O$  とし、 $O$  は数多くの諸原子から組成されるとする。一般に、諸部分  $xx$  が全体  $y$  を組成する (compose) とは、 $xx$  のどれもが  $y$  の部分であり、かつ  $y$  のいかなる部分も  $xx$  の少なくともひとつと部分を共有するということである。これを組成の定義と呼ぶことにすると、問題の人間  $O$  は明らかに、 $O$  を組成する諸原子以外にも、そうした原子の少なくともひとつと部分を共有するような「部分」を持つだろう。そうした「部分」には大小二つのパターンしかない。ひとつのパターンとして、たとえば  $O$  の肝臓は、そのどの部分も  $O$  の少なくともひとつの原子と部分を共有し、いわば  $O$  の一部の諸原子によって組成されている。よって  $O$  の肝臓は、どの原子よりも大きい  $O$  の部分である。もうひとつのパターンとして、 $O$  が持っているどの負の電荷も、 $O$  が持つ原子の各電子の部分であり、やはり  $O$  の少なくともひとつの原子と部分を共有する。こちらはどの原子よりも微小な  $O$  の部分である。

さてここで、「180cm である」という  $O$  の大きさに関する性質を  $P$  とし、構成的存在論に基づく仮定として  $P$  とは  $O$  を組成する部分だとしよう。すると、原子ではない  $P$  は次の「部分」のどちら

か一方に該当せねばならない。(a) 負の電荷のように、*O* の少なくともひとつの原子と部分を共有するような、どの原子よりも微小な *O* の部分であるか、または (b) 肝臓のように、どの部分も *O* の少なくともひとつの原子と部分を共有するような、どの原子よりも大きい *O* の部分かのどちらかである。しかし *O* のどの原子も、非常に微小であるがゆえに 180cm ではありえず、明らかに性質 *P* を例化していない。このことは、*O* のどの原子も *P* を部分として持っていないということ、すなわち *P* は *O* の少なくともひとつの原子と部分を共有する微小な *O* の部分ではないということの意味する。よって (a) は斥けられる。他方で、(b) のように、*P* のどの部分も *O* の少なくともひとつの原子と部分を共有していると考えすることもできない。*O* の各原子は原子の大きさしか持ちえず、その原子の大きさをすべて足し合わせたとしても 180cm には届かないだろう。*O* の大きさは、実際には原子間にある隙間も含んでおり、*O* の原子の大きさの和よりも大きいからである\*5。

以上から、性質 *P* は「原子以外の部分」に関する大小どちらのパターンにも該当しない。さらにこのことは、*P* だけでなく大きさに関するあらゆる性質を *O* の部分と仮定した場合にも当てはまる。これが意味するのは、*O* は性質 *P* をはじめとする大きさに関するいかなる性質も部分として持つことはなく、その結果 *O* は大きさ自体を持たない（大きさに関する性質を例化しない）ということである。しかし、個々に何らかの大きさを持つ原子から組成されている *O* が、大きさ自体を持たないという帰結は明らかに受け入れがたい。さらに悪いことに、前段落の議論は *O* だけでなく原子で組成されるあらゆるものに適用可能だろう。それゆえ構成的存在論は、「どの組成物も、大きさを持つ諸部分から組成されるにもかかわらず大きさを持たない」という結論を導くために——オルソンの言葉では「ありえない対象」を引き出してしまうために——退けられねばならない。

しかしこの批判に対する応答は、ヤンがすでに指摘している通り、物質上の部分関係と性質の部分関係を完全に区別し、部分性多元論 (parthood pluralism) に立つだけで十分である (Yang 2018: 1211–5)。部分関係を二つに分ける構成的存在論にとって、*P* が *O* の原子の少なくともひとつと部分を共有せねばならないと考えるオルソンの論証は——大小どちらのパターンであれ——いわば多義性の誤謬を犯している。たしかに、組成の定義は物質上の部分を理解する際に助けとなるだろう。性質の部分を理解する上でも助けとなるかもしれない。しかし、部分関係がけっして一意的ではないとすれば、その関係を用いる組成の定義自体もまた一意的ではないことになる。性質としての部分による全体の組成が物質上の部分による全体の組成から独立に成立する限り、前者の部分と後者の部分を一緒くたに扱うべき道理はどこにもない。したがって性質 *P* は、*O* を構成的存在論に特有の意味で「組成する」ような諸部分に含まれているとしても、*O* を物質上で「組成する」原子と部分を共有する必要はまったくないと言える。

以上より、構成的存在論一般、特に「性質という構成要素」という考えに対する主要な懸念は問題なく解消可能だと思われる\*6。

\*5 ここでオルソンは、「ある大きさが諸大きさ (sizes) 以外のものからいかにして組成されるかというのだろうか」(Olson 2017: 73) と述べていることから、180cm であるという性質 *P* は (肝臓と同様に) 部分を持ち、かつ (0.1 ナノメートルといった) その部分が原子と部分を共有すると想定している。さらに、*P* は原子間の隙間 (の大きさ) を部分として持ちうることも想定している。

\*6 他にも構成的存在論には様々な疑念が提起されてきた。たとえば、ヴァン・インワグンによる「構成的存在論はそもそも理解不能である」という問題や (van Inwagen 2011: 393–6)、オルソンによる「構成的存在論は実体二元論を含

### 3 普遍者の束理論と基体説の概観

構成的存在論の主張と背景、そして理解可能性を明らかにしたところで、そのより細かな分類を見ていくことにしよう。構成的存在論は、「性質という構成要素」をめぐる二つの問いに対応してさらなる分岐を持つ。第一に、個物の構成要素であるところの性質とは、具体的にどのようなものだろうか。「性質」の候補としてはこれまで様々なものが提案されてきたが、構成的存在論の最も典型的な立場は、この第一の問いに対し普遍者 (universal) を用いて応答する。一般に普遍者とは、複数の個物によって例化されうるといって複現可能な (repeatable) 抽象的な存在者を指す。構成的存在論にとって普遍者は、それを例化する個物の内にあるばかりか、それら個物が占める各空間的位置に同時に余すところなくあるような内属的な「性質」である。いま個物が性質すなわち普遍者のみを構成要素とすると考えると、個物とは当の個物の内にあるひとつ以上の普遍者から成るような全体すなわち「束」に相当するだろう。この見解は普遍者の束理論 (または単に束理論) と呼ばれる<sup>\*7</sup>。ここではその基本事項だけ確認しておきたい。束理論の考えでは、たとえばあるリンゴ  $a$  が赤いという性質を持つのは、赤いという内属的な普遍者が  $a$  の構成要素となるおかげである。個物  $a$  という全体が存在するのもその構成要素たる普遍者があるおかげであり、 $a$  が緑のリンゴ  $b$  のようなその他の個物から数的に区別されるのは、 $a$  と  $b$  がそれぞれ赤と緑に関する普遍者を異なる構成要素として持っているからである。個物とは普遍者だけを構成要素とするような複合物にすぎず、ある支持者の言葉を用いれば「複合物が異なるのはその構成要素が異なる場合のみ」(van Cleve 1985: 101)なのである。

束理論の形而上学的世界観では、「現実の实体は普遍者から構成され、世界の明瞭な記述に還元不可能な個物が入り込む余地はない」(O'Leary-Hawthorne and Cover 1998: 205)。言い換えれば、「形而上学的な地上階 (metaphysical groundfloor) にあるのは相互に関係し合う普遍者である」(O'Leary-Hawthorne 1995: 193) という意味で、普遍者は個物に対し形而上学的に先行しており、個物とはより基礎的な普遍者を構成要素とする複合物または束以上のものではない。もちろん、「束」と称するからには複数の普遍者は何らかの仕方で統一的に束ね上げられる必要があるだろう。普遍者を束化しそれらがともに生じていることを担保する関係は、共在 (compresence)、共存在 (coexisting)、共実体化 (consubstantiation)、共例化 (coinstantiation) などと呼ばれ、普遍者の間で偶然に成立する原初的な関係として導入される。たとえば、リンゴ  $a$  という個物は、赤さやリンゴであることなどの普遍者が共在する統一的な束である。このとき共在関係は、たとえば論理的に両立しない普遍者 (赤くないことなど) を問題の束から排除するなどの役割を担い、さらに  $a$  の構成要素たる普遍者どうしが偶然に共在関係に立つと認めることで、 $a$  が存在しなかった可能性を担保することにも役立つ (Castañeda 1974: 13–5)。標語的に述べれば、束理論の主張とは「一般に「もの」と呼ばれるような

意してしまう」という問題である (Olson 2017: 72)。だが本稿では紙幅の都合上これらを取り上げることを控える。

<sup>\*7</sup> 近年を除けば、普遍者の束理論の古くからの支持者としては Russell 1940; Castañeda 1974; van Cleve 1985; O'Leary-Hawthorne 1995; O'Leary-Hawthorne and Cover 1998 がよく知られる。ただし、ラッセルは束理論に接近する以前は長らく基体説の支持者だったこと、そしてヴァン・クリーヴは普遍者の代わりにセンスデータを構成要素として個物を論理的に構成する立場を標榜していることに注意されたい。



ものは赤さや固さなどの共存在する質の束にすぎない」(Russell 1940: 97)と要約できる\*<sup>8</sup>。

他方で、「性質という構成要素」に普遍者が含まれるのだとしても、個物の構成要素は本当に複数の抽象的な普遍者だけなのかという疑問が提起されてもおかしくはない。これが第二の問いである。一般に基体説と呼ばれる見解は、第二の問いに否定的に応答することで束理論を斥ける\*<sup>9</sup>。ここでもやはり基本事項だけ確認しておく、基体説の考えでは各個物は、複数の普遍者という構成要素にくわえて基体または裸の個物 (bare particular) と呼ばれる新たな構成要素から成る\*<sup>10</sup>。普遍者と基体という二種類の構成要素は個物に形而上学的に先行し、両要素なくして個物という全体はありえない。そして「当の基体、そしてそれと関連する普遍者から成るものとして全体が形成される」のは、「基体によって普遍者(…)が例化される」(Alston 1954: 256)ときである。たとえば、あるリンゴ  $a$  が赤いという性質を持つのは、赤いという内属的な普遍者にくわえて特定の基体が  $a$  の構成要素となり、その基体が赤さを例化するおかげである。これに対し、セラーズをはじめとする批判者はかつて、「基体」概念を自家撞着するものとして退けたことでよく知られる (Sellars 1952: 184, fn. 1)。批判は次のようなステップを踏む。基体説にしたがえば、ある個物が性質を例化することは、その個物の基体が当性質を例化することで分析される。つまり基体は性質を持つ。だが基体は、「裸の個物」すなわちいっさいの性質を欠くものの一様のはずである。つまり基体は性質を持たない。よって、基体には性質を持ちかつ持たないという矛盾が生じるように見える。

しかし、こうした批判は実際には多くの基体説の要点を外している。たとえば、著名な支持者のひとりオルストンの考えでは、個物は問題の普遍者  $P$  を「含む (include)」という点で  $P$  を例化する一方で、基体は  $P$  を「下支えする (underlie)」という点で  $P$  を例化する (Alston 1954: 257–8)。この場合、問題の普遍者を例化するあり様には二つの種類が存在することになる (cf. Allaire 1967: 261–2)。これ以外のやり方として、基体はそもそも「裸の (naked) の個物」ではないと切り返すこともできるだろう (Baker 1967: 211–2)。基体はいっさいの本性 (nature) を欠くという意味においては「裸体 (nude) の個物」ではあるとしても、普遍者を問題なく例化しようという点では裸ではないと考えられるからである。いずれの考えに与するにせよ——基体説の間でも基体の捉え方は意見が分かれる——普遍者をいっさい例化しない存在者として基体を理解する必要はどこにもないのは確実である。

では、束理論と違って基体説はなぜ基体を導入するのだろうか。それは、個物の構成要素としてその「数的差異性を基礎づける (ground)」(Allaire 1967: 269) ためである。つまり、基体とは「事物の内において (in) 事物の数的差異性を説明するような存在者」(Allaire 1965: 18) にほかならず、各個物をまさにその個物ならしめる個別化因子 (individuator) に相当する。束理論では、個物の個別化を担うものはその構成要素たる普遍者に限られたが、続く第 4.1 節で詳しく見る通り、鉄であることや丸さなどのあらゆる普遍者を共有するが数的に二つであるような鉄球の数的差異性は、束理論

\*<sup>8</sup> 束理論の支持者はしばしば構成要素と束の関係を非メレオロジー的な仕方捉えようとしてきたが、現代ではメレオロジー的束理論が登場するに至っている。これについては第 4.4 節を参照。なお我々が見る限り、少なくともラッセルは、構成要素である質とその束の関係を部分全体関係で理解していた節がある (Russell 1940: 129)。

\*<sup>9</sup> 近年を除けば、基体説の古くからの支持者としては Alston 1954; Allaire 1963; Baker 1967; Bergmann 1967 がよく知られる。

\*<sup>10</sup> 基体は薄い個物 (thin particular) とも呼ばれる。本稿では用語上これらを特に区別しない。

では容易には説明することができない。だが基体説は、各鉄球が持つ構成要素である各基体の存在に頼ることで、両者の数的差異性を問題なく説明することができる。バーグマンの言葉を借りれば、基体とは「ひとつ以上の日常的なものの「内」にあることはありえない」という意味で「個性性」(Bergmann 1967: 24)を持った存在者である。また基体の導入は、個別化という役割以外にも、複数の普遍者がひとつの個物の内で束ね上げられていることの説明にも役立つだろう (Loux 2015: 18; Wildman 2015: 1420)。赤さやリンゴであることなどの複数の普遍者がリンゴ  $a$  という単一の個物の内で一緒になるのは——ちょうど多くの針がひとつの針山に刺されているように——それら普遍者という構成要素がその基体というひとつの構成要素と適切な関係、特にある意味での例化関係に立つおかげである。この考えは、普遍者を束ね上げるものとして共在関係を持ち出していた束理論と明確な対比をなす。

以上が束理論と基体説の基本事項となるが、注意を払っておくべきことが二点ある。ひとつは、構成的存在論一般の分岐はこの二者に限られるわけではないという点である。先の第一の問いについて、「性質」として普遍者以外の候補を挙げる見解で最もよく知られているのは、おそらくトロープの束理論だろう (Simons 1994; Robb 2005; Ehring 2011; Keinänen 2011)。トロープは、普遍者と異なり特定のひとつの個物によってしか例化されないような抽象物である。この理論では、トロープは個物に形而上学的に先行している。つまり、個物とはトロープを構成要素とする束にほかならず、あるリンゴ  $a$  が赤いという性質を持つのは、赤さトロープという  $a$  によってしか例化されないものが  $a$  の構成要素となるおかげである。この  $a$  の赤さトロープは、別の赤いリンゴ  $b$  が構成要素として持っている赤さトロープとは別物であり、複数の赤い個物によって例化される赤さという普遍者とは明確な対比をなしている。

他方で、アリストテレスにまで遡る構成的存在論の「出自」に照らして考えると、先の第一と第二の問いに対し質料形相論に即して応答することも可能だろう。これによると、個物は素材となる質料にくわえて実体形相という構成要素を持ち、特に実体形相は種 (典型的には自然種) によって特徴づけられ、個物の本質として機能する。たとえば、あるリンゴ  $a$  がある性質 (特に種) を持つのは、 $a$  が質料の他にリンゴという種によって特徴づけられる実体形相を構成要素とするおかげだと考えられる (Oderberg 2007; Loux 2015; Koslicki 2018)。これら以外にも、基体説とトロープを組み合わせた見解 (Martin 1980)、基体説と事態を組み合わせた見解 (Armstrong 1997)、質料形相論と基体説を組みわせる見解 (Brower 2014) などが提案されてきた<sup>\*11</sup>。

<sup>\*11</sup> 次の二点を補足しておく。第一に、質料形相論は多くの場合構成的存在論に分類されるが、質料を因果的力能として捉える場合には関係的存在論に属するものとして理解できるかもしれない (Dummsday 2021)。第二に、構成的存在論と関係的存在論のどちらにも分類しがたい見解はたしかに存在する。性質の存在をいっさい拒否する (初期のクワインに代表される) 頑健な唯名論 (austere nominalism) や、ロウによる四カテゴリー存在論 (four-category ontology) はその一例である (Lowe 2012)。特に前者をどのように分類するかについては論者間で微妙な違いがある。たとえばヴァン・インワゲンは、関係的存在論と構成的存在論双方を個物や性質などの複数の存在論的カテゴリーの存在を認める立場に属するものと規約するため、一元的なカテゴリーしか認めない頑健な唯名論はどちらにも分類していない (van Inwagen 2011: 390)。同様にコスリキも、頑健な唯名論を非構成的存在論とした上で典型的な関係的存在論であるプラトン主義とは区別して考えているが (Koslicki 2018: 12)、オルソンは頑健な唯名論を構成的存在論とは言えないことから関係的存在論に分類し、「関係的」という名称自体にやや懐疑的な態度をとっている (Olson 2017: 63)。しかし、これらの違いは単に命名法をめぐる相違にすぎない。

次に、注意すべき二点目は、「束理論」と「基体説」の名で呼ばれるものの中には、構成的存在論ではなく関係的存在論の下に置かれる見解もあるということである<sup>\*12</sup>。例として、個物を（内属的であれ超越的であれ）普遍者の束と同一視もしくは存在論的に還元しようとする見解もまた、適切に「束理論」と呼ばれるだろう<sup>\*13</sup>。こうした「束理論」が、個物による性質例化を説明不要の原初的な事態とみなすことは決して不可能ではない。だとするといまの見解は関係的存在論に分類され、さらにそれは多くの場合、次節で見る構成的存在論としての束理論と同様の問題——たとえば、ブラックの宇宙を適切に説明し個物をどのように個別化するかを示さねばならないという問題——に直面するはずである。この点で二つの「束理論」には、たしかに性質例化の捉え方に大きな懸隔があるものの、それ以外の論点については特筆すべき類似性がある。また、関係的存在論に分類される「基体説」に至っては、第5.3節で見ると明らかな支持者が実際に登場している。

しかしながら、以下で我々は、個物の内に普遍者もしくは基体を指し、そうした構成要素を個物による性質例化の説明に利用するような種類の束理論や基体説を主として取り扱うことにしたい。この方針は、第2節冒頭で述べた構成的存在論の利点を享受できるのにくわえて、次節以降で見る通り例化や例化物に焦点を当てる現在の主要な支持者の実態に即している。また、内属的普遍者や基体にこれまで与えられてきた理論的役割に鑑みると、束理論と基体説を構成的存在論の代表的見解とみなすのは比較的自然に見える。先に述べたように、内属的普遍者はその例化物たる個物から離れていないときのみ存在する普遍者であり、基体は個物による性質例化を支えるものとして考えられてきたため、両者とも個物による性質例化と密接に関わる存在者である。ただし、だからといって構成的存在論としての束理論と基体説が、関係的存在論としての「束理論」と「基体説」とは何から何までまったく異なるわけではないという点は強調しておくに値する。中でも、個物の性質例化とは独立であるような主張や問題を取り上げる際には、各々の理論間には実質的な差異がほとんどない場合もありうる。

先述した通り本稿では、普遍者の束理論と基体説をめぐる近年の「新展開」に焦点を当てることにする。改めて共通する部分だけ取り出すと、両理論は個物という全体に形而上学的に先行する構成要素として普遍者を指定するところまで一致する。他方で、構成要素が普遍者で尽きるかどうかという点において、両理論は明らかに対比されるべき形而上学的主張を行う<sup>\*14</sup>。それでは次節からさっそく、両理論の「新展開」を見ていくことにしよう。

\*12 この点について、我々に的確に注意を促してくださった二名の匿名の査読者に謝意申し上げる。

\*13 個物の存在論的還元を主題的に取り上げた文献としては、たとえば秋葉 2014 を参照。なお秋葉が指摘する通り、ここで言われる「存在論的還元」とは、個物をその他のカテゴリーに属する存在者から成る複合物として分析し、個物という存在者カテゴリー自体の還元を目指すものである。

\*14 哲学史と関連してしばしば指摘されるように、基体説と束理論の対比は、基体を不可知のものとして導入したロックの立場と、基体を棄却し性質（知覚）の束としての実体に着目したヒュームの立場という対比になぞらえられる。後者の立場の背景には、私たちは性質以外のものを見知ることはないという（イギリス経験論に特有の）認識論的な主張がある。これに対し、分析的存在論における初期の基体説論者であるアレアが当時、基体との直接的な見知りの可能性を強調して、認識論的な懸念を払拭しようとしたことは歴史的背景から見れば自然な流れではあった (Allaire 1963)。しかしモアランドによると、こんにちでは基体にとっての真の問題は、個物の個別化に基体は必要なのかという形而上学的な点にあり、基体を本当に知覚できるかという認識論的な点にはないとされる (Moreland 1998: 256)。

## 4 普遍者の束理論の新展開

束理論によると、個物の構成要素は普遍者に尽き、一方の個物他方の個物と数的に異なることは、それらを構成する普遍者の違いに基礎づけられる。しかしだとすれば、あらゆる普遍者を共有していながら数的に異なる個物の差異性は、どのようにして説明されるのか。現代の束理論は、この問題への方策を講じる中で多様に展開してきた。以下では、まずこの問題を正確に把握することからはじめ、それに対するいくつかの応答を確認する。

### 4.1 束理論とブラックの宇宙

手はじめに、束理論の根幹をなす主張を次のようにまとめよう。

[BT] 必然的に、任意の個物  $x$  と存在者  $y$  について、 $y$  が  $x$  を構成するのは、 $y$  が普遍者でありかつ  $y$  が  $x$  によって例化されているときかつそのときに限る。

一見して明らかなように、[BT] は束理論の中心的テーゼであり、先の (2) を限定したものにすぎない。また [BT] とはさしあたり独立に、構成要素がまったく同じでありながら数的に異なる個物は存在しないと言える (Moreland 1998: 25; Loux 1998: 107)。これを構成要素同一の原理と呼んで次のように定式化しよう。

[PCI] 必然的に、任意の個物  $x$  と  $y$  および存在者  $z$  について、 $z$  が  $x$  の構成要素であるときかつそのときに限り  $z$  が  $y$  の構成要素であるならば、 $x$  と  $y$  は数的に同一である。

[BT] は個物による「例化」を普遍者という構成要素から説明しようとする束理論に特有のテーゼであるのに対し、[PCI] は個物どうしの「同一性」を構成要素の共有から説明しようとする構成的存在論において一般的なテーゼである。さて [BT] と [PCI] の二つの原理が組み合わさると、(性質を普遍者とみなすところの) 不可識別者同一の原理が導かれる。

[PII] 必然的に、任意の個物  $x$  と  $y$  および普遍者  $z$  について、 $z$  が  $x$  に例化されているときかつそのときに限り  $z$  が  $y$  に例化されているならば、 $x$  と  $y$  は数的に同一である。

[PII] にしたがえば、一方の個物他方の個物と数的に異なるためには、それらが例化する普遍者に違いがなければならない。だがしかし、かつてブラック (Black 1952) は次のような可能性を示唆した。色や形や電子の数にいたるまで完全にそっくりで、互いに 2 マイル離れた二つの鉄球のみが浮かぶ宇宙——いわゆるブラックの宇宙——は成立可能である。この対称的な宇宙に浮かぶ二つの鉄球は、内在的特徴はもちろんのこと、「近い場所にある鉄球から 2 マイル離れている」といった関係的特徴すら完全に共有している。この宇宙には、二つの鉄球のそれぞれが持つ関係的特徴を異ならせるような他の参照点が存在しないからである。よって、これらの内一方が例化する普遍者で他方が例化しない普遍者は存在しない。しかしこの二つの鉄球はまぎれもなく「二つ」であり数的に異なるのだ

から、これはまさしく [PII] の反例を形成する。ブラックの宇宙が成立可能だとすれば、[PII] を導く [BT] もまた維持されない。以上が束理論の最大の困難である<sup>\*15</sup>。

現代の束理論は基本的に、ブラックの宇宙への対処を通じてさまざまな形態へと分化している。その中でも代表的な方策は、ひとつの鉄球がバイロケーションしていると考えることにより、ブラックの宇宙が [PII] への反例にならないことを示すホーソン (O'Leary-Hawthorne 1995) らの見解である。こんにちの諸々の束理論はホーソンの議論への批判という側面も持つことを踏まえ、我々はまず彼の議論の検討からはじめたい。

## 4.2 バイロケーションに頼る応答

ホーソンとカバー (O'Leary-Hawthorne 1995; O'Leary-Hawthorne and Cover 1996) は、「不可識別な鉄球が離れた場所にそれぞれ存在する」という宇宙はたしかに成立可能だが、それらを二つのものだと考えるのは、「ひとつのものは同時に複数の場所に存在しえない」という常識的見解に縛られていると主張した。彼らによれば、ブラックの宇宙に存在するのは実はひとつの鉄球のみであり、それが二つの場所に余すところなく現れている。普遍者の束としての鉄球は、それと数的に異なる鉄球から 2 マイル離れているのではなく、その鉄球自身から 2 マイル離れているのである。このように再解釈されたブラックの宇宙は [PII] への反例にはならない。ただひとつの鉄球が異なる場所に浮かんでいる、つまりバイロケーションの状態にあるにすぎないからだ<sup>\*16</sup>。

ひとつのものが同時に複数の位置を占めるという主張はあまりに突飛で受け入れがたく思われるかもしれない。しかしホーソンによれば、こうした主張はブラックの宇宙への対処から苦しまぎれに編み出されたというよりも、むしろ普遍者を内属的と捉える限り必然的に導かれる帰結である (cf. Curtis 2014)。したがって、「その思考実験は束理論がすでに気づき、受け入れているはずの帰結を我々に思い出させるにすぎない」(O'Leary-Hawthorne 1995: 196)。同時に複製可能な普遍者だけからなる個物を真剣に考慮している時点で、我々はすでに日常的なものから見方から外れている

<sup>\*15</sup> 束理論と [PII] に対し、ジーマーマンはこれとよく似た反例を提出している (Zimmerman 1997)。これによると、対称的な宇宙に置かれた二つの電子 (電子に関する性質の二つの束) が非決定論的な法則に支配されるとき、それらはたしかに現在こそ不可識別だが、のちに異なる振る舞いをするかもしれない。少なくともこの可能性は排除できないが、束理論にしたがうと一方の電子は他方の電子と同一の束となってしまう。これに対し束理論に立つ者は、対応者理論 (counterpart theory) を用いれば問題を回避できる。というのも、ひとつの束としての電子はひとつの可能世界の内二つの対応者を持つことができ、それらが当の世界で異なる振る舞いをする二つの電子だとしてもいかなる問題もないからである。しかし、問題の電子が同一だと考えられる限り、それらはいかなる可能的状況においてもまったく同じ対応者を持たねばならず、各電子が異なる振る舞いをするような対応者を持つ可能性を排除せねばならない。よって、これが事象様相に対するアドホックな制限となる限り、対応者理論だけではいまの問題を回避できないとされる。

<sup>\*16</sup> ブラックの宇宙を PII への反例としないような解釈は複数ある。たとえばハッキングは、非ユークリッド幾何学では鉄球は二つではなくひとつの鉄球として再解釈できるとした上で、PII は可能世界における個物の同一性を導く形而上学的原理というよりも、個物についてのありうる記述を統制するようなメタ原理として理解することを提案している (Hacking 1975)。しかし、非ユークリッド幾何学による「再解釈」を提示するだけでは、不可識別な二つの鉄球が存在するという可能性をブロックできたことにはならず、また PII を可能な記述についてのメタ原理と見ると、可能世界の豊かさを不当に制限するものである (French 1995)。他にも、ホーリーは、同一の鉄球が複数の場所に浮かんでいるのではなく、複数の場所に鉄球状の部分を持つ離散的物体がただひとつ存在するという解釈を提案している (Hawley 2009: 111-4)。このときブラックの宇宙に数的に異なる個物は存在しないから、[PII] は破られない。もっともこうした応答にしても、以降で見るようなホーソンに対する批判がそのまま当てはまるだろう。

し、そうしたリスクは承知されている。それゆえ、目下の主張が常識外れだと批判されたなら、「普通の人々は厳密な同一性によってものを数えているわけではない」(O'Leary-Hawthorne and Cover 1996: 212) と肩をすくめるまでだ。

ホーソーンの見解は、一部の論者が解釈するように (cf. Vallicella 1997)、個物というカテゴリーの消去ないし無視であると評価すべきではないだろう。繰り返しになるが、彼は個物それ自体が複現可能だと考えていたのであり、けっして個物と普遍者を混同しているわけではない。しかしそれでもなお彼の見解には、常識からの逸脱よりも実質的な問題があると指摘されている (Rodriguez-Pereyra 2004: 73–4)。それによれば、ホーソーンの見解はそもそもブラックの宇宙に対する応答になっていない。彼は単に議論の前提をすげ替えているだけだ。ブラックの宇宙はまさにそこに二つの鉄球があると述べているのであり、その前提は容易に掘り崩せるものではない。そのことを確認するには、かつてアダムス (Adams 1979) が提示した「ほとんど不可識別な対象からの議論」を追えばよいだろう。それは次のように整理できる。ブラックの宇宙の二つの鉄球の一方のみにほんのわずかな化学的不純物が含まれていたとき、これらは別々の鉄球だと問題なくみなされる。すると、その不純物の有無によって二つの鉄球が突然ひとつになることなど考えられないから、「ほとんど不可識別な二つの鉄球」がある可能性から、様相的直観をたどって「完全に不可識別な二つの鉄球」がある可能性を難なく導くことができる<sup>\*17</sup>。

ホーソーン的主張にかかる以上のような問題を下敷きとして、以降の束理論は大きく二つの道に分かれている。まず一方に [BT] が [PII] を含意することを否定する見解がある。こちらは基本的に [PII] の維持を諦めるが、しかし束理論はそれを含意しないため無傷のまま生き残る。他方に、[PII] ないし [PCI] は束理論の重要な側面であるとして、ホーソーンと同様に [PII] を破らないようなブラックの宇宙の解釈を試みる見解がある。以下ではこれらの応答を順に見ていくことにする<sup>\*18</sup>。

### 4.3 例化物に頼る応答

[BT] と [PCI] の連言が [PII] を含意し、[PII] に反例があるのだとすれば、[BT] を守るためには [PCI] を否定するしかない。ロドリゲスペレイラ (Rodriguez-Pereyra 2004) はこのようなシンプルな着想に基づいて、ブラックの宇宙の二つの鉄球は同じ構成要素から構成された別個の対象であると主張した。議論の鍵となるのが、普遍者の束と普遍者の束の例化物 (instance) の区別である。まず普遍者の束は複現可能、すなわち同時に複数の位置を余すところなく占めることができる。しかし、普遍者の束が丸ごと例化された対象、つまり束の例化物は複現可能ではない。そして、個物は普遍者の束そのものではなく普遍者の束の例化物である。個物の構成要素は普遍者に尽きるが、個物の

<sup>\*17</sup> ただし後年の論文 (Rodriguez-Pereyra 2017b) でロドリゲスペレイラは、「ほとんど不可識別な対象からの議論」の正当性に疑問を投げかけている。もっとも彼はホーソーンの見解の擁護へと舵を切ってそう主張したわけではない。

<sup>\*18</sup> 本稿が「二つの道」として [PII] の否定と肯定による束理論の展開は、大まかに Curtis 2014 や Zhang 2018 による「例化物説 (instance-view)」と「同一説 (identity-view)」の区分に対応している。例化物説的な見解として Rodriguez-Pereyra 2004 や Benocci 2018、同一説的な見解として Curtis 2014 が挙げられる。

数的差異性の源泉は東ではなく東の例化物にある<sup>\*19</sup>。いまブラックの宇宙に立ち返れば、二つの鉄球は同じ普遍者の東からなる別個の例化物だとわかる。すると、ブラックの宇宙が [PII] を脅かすとしても、[BT] それ自体は破られない。「例化物とその東は二つの異なる存在者」(Rodriguez-Pereyra 2004: 78) だからである。

「例化物」を援用して [PCI] を拒否する東理論は、もうひとつ存在する。チャン (Zhang 2018) は近年、個物は普遍者の東の例化物であるとするロドリゲスペレイラの考えを退け、個物は普遍者の例化物の東であると主張している<sup>\*20</sup>。すなわち、赤さや丸さといった普遍者はまずそれが例化物となることによって個別化・分節化され、そのような普遍者の例化物が東となって個物が構成される。つまり、ひとつの普遍者だけを構成要素とするたくさんの例化物が集まってはじめて個物ができる<sup>\*21</sup>。このとき、個物の構成要素は普遍者の例化物となり [BT] が脅かされると思われるかもしれない。しかしチャンによると、普遍者の例化物はあくまで普遍者に依存した派生物にすぎない。たとえば赤さの例化物が存在するのは、赤さという普遍者が存在するときに限る。そのような意味で、個物の最も基礎的な構成要素はあくまでも普遍者である。そして基礎的な構成要素つまり普遍者を完全に共有しながらも、それらに依存したそれぞれ別個の例化物からなる数的に異なる個物が存在しうる。それゆえ [PCI] は否定され、ブラックの宇宙が [PII] の反例になるとしてももはやいかなる問題も生じない。

さて、ロドリゲスペレイラとチャンの例化物説はどちらも、個物の個別性の源泉を例化物の複現不可能性に求めている。しかしそうすると、「例化物だけが複現不可能であるのはなぜか」という問いが自然と浮かんでくるだろう。彼らはこうした問いには答えておらず、例化物の複現不可能性、ひいては例化物どうしの数的差異性を原初的な仕方では認めているに等しい。この点に留意すれば、たとえ彼らが性質例化を構成要素関係で理解したとしても、個物の同一性を構成要素（目下の文脈ではではもっぱら普遍者）の共有によって説明するという構成的存在論の別の重要な側面は放棄していることがわかる。[PCI] という一般的テーゼを否定する以上、これは例化物説が引き受けねばならない不可避の帰結である。しかしその代償はけっして小さくないだろう。なぜならば、「まったく同じ普遍者を例化する問題の例化物ないし個物は、なぜ同一ではないか」という問いこそがブラックの宇宙の

<sup>\*19</sup> 我々の見るところ、ロドリゲスペレイラの戦略は、グラシアによって予見されていたと理解可能である。グラシアによると、二つの鉄球は「同じ特徴を持つ異なる例化物」であり、「各々の球体は同じ特徴を持つ異なる例化物であるという点においてのみ異なる」(Gracia 1988: 198) と解釈できる。ただし、こうした東理論が「伝統的な東理論とは抜本的に異なる」(Ibid.) ことをグラシアは認めている。

<sup>\*20</sup> チャンと似た東理論は、バーカーとジェイゴによっても支持されている (Barker and Jago 2018)。彼らによると、物質的対象（個物）とは普遍者の例化物の東であり、このとき例化物は時空的位置を占める物質的な存在者である。しかし彼らの東理論は次の二点でチャンのものとは異なる。第一に、物質的対象を構成するのは、普遍者の中でも特に（ファインが論じた）非様相的な「本質」である。この普遍者は、物質的対象が何であるかを表す。第二に、「東」はメレオロジー的に理解される「和」であり、物質的対象（個物）とは結局のところ、本質に相当する普遍者の例化物のメレオロジーの和である。

<sup>\*21</sup> このような個物観はトロープの東理論と似ていると思われるかもしれない。少なくともアーリング (Ehring 2011) が擁護するようなトロープの東理論とチャンの東理論はどちらも、トロープと普遍者の例化物という、不可識別でありながら数的に異なる原初的対象から個物が構成されると考える点で一致している。しかしチャンは、普遍者の例化物がトロープと異なることをしきりに訴えている。その要点は、トロープの東理論の求めるトロープが単純物であるのに対して、普遍者の例化物はあくまで普遍者から構成される複合物だということだ (Zhang 2018: 485)。このとき世界の最も基礎的な存在者はあくまで普遍者である。なお、ロドリゲスペレイラは後年の論文 (Rodriguez-Pereyra 2017a) で、「完全に不可識別でありながら数的に異なる普遍者が存在する」というチャンと似た主張を展開している。

中心問題だとすると、例化物説はその説明を実質的に投げ出しているからだ。つまり例化物説は、ブラックの宇宙への応答を前進させるものではなく、鉄球は「何か他の点で異なるのではなく、その二つの対象はそれらがそれらの対象である点で異なっている」(Hawley 2009: 117)として、個物の同一性の原初性を認める立場とさほど変わらないとすら言える。

例化物説のこうした困難は、例化物の複現不可能性にきちんとした基礎づけが与えられれば払拭されるだろう。たとえば、普遍者を束ね個物を作り出す共在関係は各々の個物によって固有であるとし、それこそが例化物の差異の基礎にある（ないし例化物そのものに相当する）と主張できるかもしれない(cf. Benovsky 2008)。第3節で見たように、束理論にとって共在関係は例化に相当するからだ。とはいえすぐ予想されるように、今度は共在関係が例化物の複現不可能性をどうやって生み出すのかが謎めいてしまう。すなわち、共在関係も「関係」であり一種の多項性質とみなせる以上、それ自体性質として普遍的に存在する共在関係が複現不可能性を担保するメカニズムには何らかの説明が求められる。この説明が放置されるなら、また新たな「原初主義」が顔を出すことになるだろう。

まとめると例化物説は、性質例化を構成要素関係で分析する点、そして普遍者のみを基礎的な存在者とする点でたしかに束理論的ではあるものの、個物の同一性をその構成要素によって説明することは放棄せざるをえない。ここで放棄された構成的存在論の動機付けは、ルーが構成的存在論の「枠組み的制約 (framework constraint)」(Loux 2006: 221)と呼ぶほどに重要なものであり、例化物説の支持者は二つの鉄球の差異性について、[PCI]に代わる形而上学的な説明を用意せねばならない。さらに言えば、束理論から[PII]の含意をブロックするという路線は最初から魅力に乏しいかもしれない。というのも、束理論は本来「裸の個物」を認めないという点で基体説よりも基礎的存在者の数が少ない理論だったのだから、例化物の導入・強調による存在者の増加は、儉約性という観点から見ると明らかに逆のコースを辿るからだ。いくらブラックの宇宙に応答するためとはいえ、束理論の元来の美德を失っては本末転倒ではないのか。次節では、束理論が[PII]を含意することをネガティブに捉えずにブラックの宇宙に対処するような試みを見てゆこう。

#### 4.4 メレオロジー的束理論による応答

世界には普遍者だけが存在し、それが束ねられるメカニズムはありふれた部分全体関係によって明らかにすることができる。こうした見解はこんにちでは、メレオロジー的束理論 (mereological bundle theory) と呼ばれる。主要な支持者であるポールによると、具体的な個物をはじめとするあらゆる存在者は、複数の質 (qualities) のメレオロジー的な束ないし融合体に相当し、この場合「質」とは内属的普遍者といった原初的な存在者を指す (Paul 2006: 631)<sup>\*22</sup>。換言すれば、「物質や具体的対象、抽象的对象、そしておそらくは時空さえも、諸々の質のメレオロジー的な融合から作られる」(Paul 2017: 33)。この描像が教えるところでは、世界とはおびただしい数の普遍者を「部分」とするような巨大な混合物なのである。さらにポールは、単一カテゴリー存在論 (one category ontology)

<sup>\*22</sup> ただしポールは、「性質をトローブまたは普遍者として特徴づけるかは、同じコインの異なる側面にすぎない」(Paul 2002: 583)として、「質」ないし「性質」がトローブである可能性を完全に排除しているわけではない (cf. Paul 2012: 246)。



のもとでメレオロジー的束理論を理解することを促す。その主要な目的は、「個別者と性質の区別を崩壊させ、それを内在的特徴ないし質という単一の基礎的カテゴリーに置き換える」(Paul 2017: 32; 傍点は原著ではイタリック体。以下同様) ことである。すると単一カテゴリー存在論のもとでは、種々の普遍者から成るメレオロジー的な束はもはや、「個物」という特殊なカテゴリーに属する存在者ではない——普遍者の束それ自体もまた抽象的な普遍者の一種となる。こうした儉約的な存在論を展開することでポールは、特殊組成問題や一時的内在的性質の問題を含む現代の形而上学的な諸問題を巧みに解決しようとする<sup>\*23</sup>。

ブラックの宇宙に対するポールの応答を見る前に、彼女のメレオロジー的束理論がどういう主張であるかを少しばかり見ておこう。彼女の束理論で基本となるのは、「融合体はそれが例化する普遍者を質的な真部分 (proper qualitative part) として持つ」という考えである。つまり、個物  $x$  がある性質  $P$  を例化するとは、 $x$  が  $P$  を質的な真部分として持っているということにほかならない。質的な真部分関係は、古典外延メレオロジーで措定される真部分関係と同様に、非反射的で非対称的で推移的な関係、すなわち狭義順序である。また、対象  $x$  が対象  $y$  の質的な部分 (qualitative part) であるとは、 $x$  が  $y$  の質的な真部分であるか、または  $x$  と  $y$  が同一であるときかつそのときのみである。すると、 $y$  が複数の対象  $xx$  から成る質的な融合体であること、すなわち  $xx$  による  $y$  の質的な組成 (qualitative composition) は、次のように定義される。すなわち、 $y$  はすべての  $xx$  を質的な部分として持ち、かつ  $y$  は  $xx$  の各々と質的に互いに素である (つまりどの  $xx$  とも質的な部分を共有しない) ような質的な部分をいっさい持たない。このように定義される質的融合体こそが従来の束理論が言うところの「普遍者の束」に相当し、原初的關係としてそこで置かれるのは質的な真部分関係、そして質的な組成関係に限られる——これがメレオロジー的束理論の中心的な主張である。

とはいえポールによると、質的な組成には少なくとも二つの方向から制限が課せられる。第一に質的な組成は、普遍者が複数存在する場合にいつでも成り立つわけではない。というのも、質的な融合体から普遍者をひとつ取り除いただけの「不完全な対象」など存在しないからである (Paul 2017: 39, fn. 14)。また、「矛盾した性質どうしの融合やそれに類するものは明らかに不可能」(Paul 2006: 655, fn. 25) である。不完全もしくは矛盾した融合体の存在を導かないようにするには、質的な組成が成立する条件に一定の制約を設ける必要がある。このことからポールは、質的な組成については、古典外延メレオロジーで措定される無制限組成の原理を事実上拒否している<sup>\*24</sup>。第二に、彼女の依って立つ存在論が単一カテゴリー存在論であることは、質的な組成においても忘れてはならな

<sup>\*23</sup> たとえば、一時的内在的性質の問題への応答として、ポールは耐続 (endurance) という三次元主義的な概念を次のように捉え直す。すなわち、質的な部分の融合体としての対象  $x$  が耐続する、すなわち異なる時点で余すところなく存在し対象  $y$  と通時的に同一であるとは、 $x$  と  $y$  が特定の偶然的性質を共有しないとしても因果・歴史的起源などの本質的性質を共有するということである。なお、耐続説とは反対に、時間的部分を持ち出す延続 (perdurance) 説と組み合わせられた一般的な束理論は、カスーロによって示唆されたものの (Casullo 1998)、一部の論者が論じる通り、束理論と延続説を両立させるには看過しがたい困難がある (Hughes 1999; Swenson and Rettler 2019)。

<sup>\*24</sup> これに対し同じくメレオロジー的束論者であるラフランスは、普遍者から制限なしに組成される融合体はつねに物質的対象とは限らないと認めることで、時空上の組成だけでなく質的な組成についても無制限組成の原理を保持する路線をとっている (Lafrance 2014: 212–6)。この路線の利点は、ポールと違って、質的な組成と時空上の組成についての統一的なメレオロジーの見解を放棄せずに済むということにある (ポールが質的な組成と時空上の組成を厳密に区別することについては脚注 26 を参照)。

い。質的な融合体は、複数の質的な部分から成る抽象的対象である限り、それ自体では具体的な個物ではないのだった。換言すれば質的な組成は、抽象的なものを具体的なものに変えるほどの産出能力を持つわけではないのである (Paul 2017: 42)\*<sup>25</sup>。

質的な組成関係の導入は、ポールの束理論が備える顕著な利点を際立たせてくれるだろう。その利点とは、従来の束理論で登場していた「共在関係」を質的なメレオロジーの観点から理解できることである (Paul 2017: 40)。複数の普遍者を統一的に束ね上げる共在関係は、束理論に独自の原初的な関係として措定され、それに詳細な説明を与えることは一般的な束理論が抱える困難のひとつだと考えられてきた。しかし、同じく原初的ではあるにせよ、直観的に十分理解可能な質的な組成関係を用いれば、その困難を多少和らげることができる。たとえば、性質  $P$ ,  $Q$ ,  $R$  が共在することで個物  $a$  が存在するという事態は、 $a$  が  $P$ ,  $Q$ ,  $R$  から質的に組成される質的な融合体であるという事態として記述可能である。また、 $P$ ,  $Q$  だけでは共在関係が成立しないことや、論理的に両立しえない普遍者どうしが共在しえないことは、質的なメレオロジーでは無制限組成の原理が成立しないことと対応するだろう。こうした枠組みでは、質的な組成関係としての「共在関係」はもはや謎めいたものではなく、一般的なメレオロジーで取り扱われる時空上の（物質上の）組成と類比的な仕方を取り扱うことができる\*<sup>26</sup>。

それでは、先述のブラックの宇宙に対しメレオロジー的束理論はどのような応答をなすのだろうか。残念ながらポール自身の応答はやや歯切れが悪い。彼女は、二つの鉄球を二つのメレオロジー的な融合体として捉える一方で、その同一性ないし差異性をめぐる事実は「端的に問題の対象それら自身にスーパーヴィーンする」と認め、「球体は異なっている。以上 (That's it)」 (Paul 2017: 50) と主張する。こうした応答は、鉄球が不可識別であるにもかかわらず二つであることの根拠、すなわち鉄球としてのメレオロジー的な融合体がまったく同じ普遍者を質的な真部分として共有しながらも数的に異なることの根拠を有意義な仕方では説明するものではない。結局のところポールの応答は、メレオロジー的な融合体の個別化を実質的に原初的なものとみなすに等しく、ブラックの宇宙が束理論全体に突き付ける困難を「困難」として受け取らないという提案以上のものではない。

もちろん、ここでメレオロジー的な束論者は、ポールとは異なる路線からブラックの宇宙に応答可能だろう。真っ先に思い浮かぶのは、質的な真部分から外延性 (extensionality) を放逐するという案かもしれない。こうすれば、仮に鉄球がまったく同じ質的な真部分から成るとしても、たしかにそれらはかならずしも同一ではないと主張できる。実際、こうした非外延的なメレオロジー的束理論の可

\*<sup>25</sup> しかし、これについてはクリーゲルによる次のような反論がある (Kriegel 2021)。彼によると、具体的な物質的対象は、座標によって区切られた空間領域を埋め尽くし、それゆえに我々が手で掴むことができるという意味で空間を占有する。しかし、普遍者を含む抽象物としての性質は空間を占有せず、空間を占有しないものの和もやはり空間を占有しない。よって、具体的な物質的対象は性質の和ではありえない。こうした批判がポールに対する反論となるのは、彼女が「質」とは別のカテゴリーを頑なに認めようとせず、質的な組成が具体物を産出することに強く反対するからである。

\*<sup>26</sup> ただし、ポール自身は時空的な組成にやや冷淡な態度をとっている。彼女によると、時空的な諸部分から融合体を生み出す時空的な組成は、いっさいの存在論的含意を持たない虚構ないし概念上のツールに留まるか、もしくは質的な組成の事実スーパーヴィーンするものにすぎない (Paul 2012: 243)。こうした主張の根拠になっているのは、時空的部分を世界の基礎的な存在者とみなすと、近年の物理学の知見と衝突してしまうというメレオロジー的束理論とは独立の見解である。

能性は、一部の支持者によって提案されてきた (Benocci 2018)<sup>\*27</sup>。しかし一見して明らかなように、この考えは先の例化物説とよく似た困難に直面するはずである。つまり、単に [PCI] を拒否するだけでは、まったく同じ普遍者の束であるところの例化物どうしがなぜ数的に同一でないかを説明したことにはならないのと同様に、単に質的なメレオロジーの外延性を拒否するだけでは、質的な真部分を同じくする質的な融合体がなぜ同一ではないかを説明したことにはならない。その結果、非外延的なメレオロジー的束理論には、各々のメレオロジー的融合体の同一性・差異性をめぐる事実をいかにして説明するかという疑問が依然として突き付けられるだろう。

#### 4.5 弱い識別可能性による応答

メレオロジー的束理論はブラックの宇宙を十分に説明できないのだろうか。ここでは、もうひとりのメレオロジー的な束論者であるシバーの见解を検討したい (Shiver 2014)。シバーは、あらゆる質的な真部分を共有する質的な融合体は数的に同一になること、すなわち外延性が維持されることをはっきりと擁護する。このため、メレオロジー的に再解釈された [PCI]、ひいては [PII] はどちらも否定されない。だが彼はホーソンとは異なり、ブラックの宇宙に浮かぶそれぞれの鉄球は異なる位置にあるがゆえに別個の対象であると主張する。いま二つの鉄球をカストルとポルックスと名付けよう。このとき、カストルはポルックスから 2 マイル離れているのに対し、カストル自身から 2 マイル離れているわけではない。この「から 2 マイル離れている」という位置関係によって区別される限り、異なる位置的性質によって質的に組成される質的な融合体も当然別個の対象となる。つまり、カストルとポルックスは空間上の位置について異なる質的な部分を持つために数的に同一ではないのである<sup>\*28</sup>。

こうしたシバーの戦略は、幅広い文脈で支持を集めてきたいわゆる弱い識別可能性 (weak discernibility) を利用したものだろう (Meiland 1966; Quine 1976; Saunders 2006)。この戦略によると、任意の対象  $x$  と  $y$  について、 $x$  と  $y$  が弱く識別可能であるのは、何らかの非反射的な関係  $R$  が  $x$  と  $y$  の間に成り立つこと、すなわち  $Rxy$  かつ  $\neg Rxx$  が成り立つときかつそのときのみである。非反射的關係  $R$  の典型例には、「から 2 マイル離れている」や「の左側にある」という空間的な位置関係が含まれ、二つの弱く識別可能な対象の間にはつねにこうした非反射的關係が成り立っている。よって、ブラックの宇宙についてのシバーの要点は次のようにまとめられる。すなわち、カストルとポルックスの間に「から 2 マイル離れている」という非反射的關係が成立する限り、それら二つの質的な融合体は実際には不可識別というわけではなく、質的なメレオロジーにおける外延性——数的に異なる質的な融合体は質的な真部分においても異ならねばならないという原理——にも抵触しない。弱い識別

<sup>\*27</sup> ただしポール自身も、自身の質的なメレオロジー体系に弱い補部分の原理しか認めておらず、強い補部分の原理から論理的に帰結する外延性の擁護に慎重な態度をとっている (Paul 2006: 17; Paul 2017: 39)。

<sup>\*28</sup> メレオロジー的束理論に立つケイナネンとタフコは、シバーと同じく、位置に関する二つの普遍者 (種的な普遍者) を用いて、ブラックの宇宙における二つの鉄球の数的差異性を説明している (Keinänen and Tahko 2019: 855)。ただし彼らの束理論は、個物とは普遍者の (「束」というよりは) 単なる複数性であり、その複数性は位置に関する普遍者にくわえて、(ロウが四カテゴリーで指定したような) 種的な普遍者をかならず例化せねばならないと考える点で特殊である。

可能性を用いれば、ブラックの宇宙はメレオロジー的束理論の枠組みにおいても優れた根拠をもって説明可能なのである。

しかしながらシバーの応答は、弱い識別可能性の戦略が古くから抱えてきたある批判から逃れることができているように見える。それは、対象の数的差異性を前提することに関する次のような批判である (Allaire 1965: 19; Rosenkrantz 1993: 97; Hawley 2009: 110)。いま  $R$  を非反射的な空間的位置関係とすると、ブラックの宇宙において  $\lambda x \lambda y (Rxy)[a, b]$  が成立することは、 $a$  と  $b$  がカストルとポルックスのように数的に区別されることを仮定した場合にしか成り立たない。というのも、 $a$  と  $b$  どちらもカストルである場合、 $\lambda x \lambda y (Rxy)[a, b]$  はけっして成立しえないからである。つまり、 $\lambda x \lambda y (Rxy)[a, b]$  と  $\lambda x \lambda y (Rxy)[a, a]$  を区別し前者の成立を認める一方で後者の成立を排除するには、そもそも  $a$  と  $b$  の数的差異性が成立していなければならない。しかし  $R$  の論理的性質に非反射性を置くことは、 $\lambda x \lambda y (Rxy)[a, a]$  の成立を排除することにほかならず、その一方で  $\lambda x \lambda y (Rxy)[a, b]$  の成立を認めることは  $a$  と  $b$  を数的に区別することで初めて可能になるはずである。よって、 $\lambda x \lambda y (Rxy)[a, b]$  が成立し、そこで登場する  $R$  が非反射的な関係である限り、弱い識別可能性はブラックの宇宙においてカストルとポルックスの差異性を基礎づけるというよりも前提してしまっている。少なくともシバーの応答は、こうした嫌疑を晴らさねばならない。

これに対しシバー自身は、カストルとポルックスの間に弱い識別可能性が成立するためには位置的性質の違いが必要となるとした上で、その違いを原初的とみなすことを提案している。こうした応答は、原初性をどこに置くかにおいて、先のポールの応答と明白な対比をなすだろう。ポールにとって質的な融合体の差異性に関する事実は原初的だった。対照的に、外延性を積極的に認めるシバーにとってそうした事実は、質的な融合体の質的な真部分によって説明されねばならない。だが、融合体どうしの同一性／差異性が原初的でないことは、その真部分としての普遍者どうしの同一性／差異性が原初的であることを排除するわけではない。実際、カストルやポルックスの質的な真部分となる各位置的性質は、そうした原初的にしか区別できない普遍者である。したがって、カストルとポルックスという二つの質的な融合体が数的に区別されるのは、たしかに位置に関する質的な真部分の違いのおかげであるが、質的な真部分の違いそれ自体は説明不要なのである。シバーの言葉を借りれば、「メレオロジー的な束論者は、性質どうしの説明不要の (brute) 違いを置くだけで、幅広い種類の対象間に原初的でない違いを与えることができる」(Shiver 2014: 912) というわけである。

シバーの応答の成否はともかくとして、第4節全体の議論から気付かされるのはおそらく次の点だろう。すなわち、ブラックの宇宙において不可識別な鉄球の数的差異性を十全に説明するためには、どの束論者もどこかで個別化の遡行を止める必要に迫られるということである。言い換えれば、例化物であれ、質的な融合体であれ、位置的性質であれ、存在論の最も基礎的な部分には原初的な個別化因子が置かれねばならない。一部の形而上学者が説明してきた通り、「分析的存在論ではやがて原初的なものに行き着き」(Moreland 1998: 258)、「すべての存在論は、遅かれ早かれ個別化を基礎的なものとして理解するしかない」(Oaklander and Rothstein 2000: 98) のである。この事実を踏まえると、どこかで原初的な個別化因子へとたどり着くという点においてすべての理論はイーブンに映り、目下の論争の意義が霞んで見えるかもしれない。だがしかし、やはり我々は個別化の問題を真に哲学的な問題だと考える。なぜならば、どのような存在者を原初的な個別化因子として置くかによ

て、そこから立ち上がる哲学的世界観は大きく様変わりするからである。裏返して言えば、似たような存在者を存在論の基礎的な部分に置く理論どうしは、束理論かそうでない理論（たとえば基体説）であるかにかかわらず、比較的類似した世界観を描き出すはずである。例として、本節で見たシバーの束理論と、次節で検討する「基体とは時空領域である」という特定の基体説は、個物から切り離された時空的位置を重視するというところで、構成的存在論内部の対立を超えてよく似た世界観を提示するだろう。こうしたややメタ的な視点を保持しつつ、我々はそろそろ基体を最も基礎的とみなす存在論を見ていくことにしたい。

## 5 基体説の新展開

基体説によれば、個物は基体と性質という二種類の構成要素でできている。そして基体の主な仕事は、個別化因子となること、そして個物の性質の針山となることだ。基体にこのような仕事を負わせるにあたって、近年の基体説は「個物が性質を持つ仕方」と「基体が性質を持つ仕方」を峻別する傾向にある。このような区別がもたらした基体説の新たな展開を以下で見よう。

### 5.1 基体説と二つの「例化」

第3節で簡単に見たように、基体はしばしば性質を欠いた裸の存在だとみなされてきた。そのゆえんを改めて確認したい。背理法の仮定として、基体が性質を持つとする。構成的存在論にしたがって性質を持つとはそれを構成要素とすることだと考えると、基体が性質を持つならば、基体の内にさらなる部分が認められる。しかしだとすれば、次のような二つの疑問が生まれる。基体の下部構造としての部分がばらばらにならないのはなぜか、そして下部構造をまったく同じくする基体はどのように区別されるのか。こうした疑問の根は同じであり、要は基体が性質を持つとすれば基体そのものがまた性質の束になってしまうのだ。これを解決するには基体の下部構造の中に「基体の基体」を含めなければならないが、こうしたプロセスは明らかに無限後退を導く。したがって基体は性質を持ちえない (cf. Merz 2001: 50; Loux and Crisp 2017: 104)。しかし基体は、それがあつ性質を例化することではじめて個物による当性質の例化を説明することができるのだった。だとすると、第3節ですで見たとように、基体はやはり性質を持ちかつ持たないという矛盾を招いてしまう。

こうした問題への対処にあたっては、個物と基体の性質例化の区別が重要となる。そのそれぞれの呼び方について、第3節では「含む」と「下支えする」というオルストンの命名を見た。モアランドとピカヴァンス (Moreland 1998: 257–8; Moreland and Pickavance 2003: 4) はこれを「根付いている (rooted within)」と「紐付けられている (tied to)」とし、ワイルドマン (Wildman 2015: 1425) は「所有する (possess)」と「担う (bear)」と呼び分けている。ここではワイルドマンの用語法を採用しよう。いま個物  $x$  が性質  $P$  を「所有する」ことは、 $x$  の基体が  $P$  を「担う」ことによって分析される、ないしはそれに「基礎づけられる (grounded in)」 (Moreland 2000: 48)。基体は、個物と違って性質をまったく所有しないという点では裸だが、個物が性質を所有するときならずその性質を担うという点では裸ではなく、ここに矛盾はない。さらに、「所有する」関係は構成要素関

係だが「担う」関係はそうではない。すると、性質を所有しない基体は構成要素を持たない単純物であるから、そこに下部構造など存在せず、基体が普遍者と築く「担う」という関係は原初的である。モアランドが指摘する通り、「諸性質が裸の個物に紐付けられているということは原初的な事実であり、このこと自体は裸の個物の内にあるさらなる特定の能力や性質に基礎づけられている必要はない」(Moreland 1998: 258)。これを比喩的に述べれば、緑の針山に赤い針が刺されたからといって、針山自体が赤くなるわけでも、針山の中に別の針山ができるわけでもないのである。これにより無限後退の問題はクリアできる。くわえて、「あらゆる存在者は性質を持たねばならないが、基体はどの性質も持たないために不合理である」という伝統的な批判 (Hoffman and Rosenkrantz 1994: 48–9) も、性質例化の区別の前ではもはや無力である。この批判の前提である「基体は性質を持たない」を「基体はたしかにいかなる性質も所有していないが、少なくともひとつの性質を担っている」と解釈すれば、基体概念はかならずしも不合理とは言えないだろう (cf. Moreland and Pickavance 2003; Garcia 2014a)\*<sup>29</sup>。

このような恩恵をもたらすことから、性質例化の区別はもはや現代の基体説の標準装備とさえ言える\*<sup>30</sup>。だとすると基体説に対するこんにちの批判者は、こうした区別を理解不能だと一蹴するのはなく、それを認めた上でなお基体説が失敗に終わることを論証しなければならない。そのような実質的な批判として、以下ではベイリー (Bailey 2012) とデイヴィス (Davis 2004) の議論を順に見ていこう。

\*<sup>29</sup> しかしジバーマン (Gibberman 2012: 315–20) は基体説のこの主張に対し不満を述べている。いわく、何ら実質的な特徴を持たない基体が少なくともひとつの性質を必然的に担うとすれば、基礎的な種類を異にする二つの存在者の間には必然的な結びつきはなく独立に存在するというヒュームの教えに反する。

\*<sup>30</sup> 二種類の性質例化を備えた基体説の支持者として、本稿で登場する者以外には、Oaklander and Rothstein 2000; Ten Elshof 2000; Preston 2005; Pickavance 2009; Gould 2013; Garcia 2014a がいる。ただし、こうした基体説が、構成的存在論の枠組みから逸脱しかけていることは頭の片隅に入れておきたい (この点は匿名の査読者の指摘による)。我々は第1節の(2)で、構成的存在論の主張を、「個物  $x$  が性質  $P$  を例化するのは、 $x$  が  $P$  を構成要素とするおかげである」と整理した。実際、モアランドも「ソクラテスが白い (...) のは白さがソクラテスの構成要素となるからである」(Moreland 2013: 257) と主張している。しかし他方でモアランドは、構成要素関係が「担う」関係に「基礎づけられる」(Ibid.: 250) とも認めている。つまり目下の基体説は、「個物  $x$  が性質  $P$  を構成要素とするのは、 $x$  の基体が  $P$  を担うおかげである」と考えており (これを(2\*)とする)、構成要素関係よりも基礎的な「担う」関係を置いているかのように見える。そうすると、このとき(2)は余剰な主張になりかねない。というのも、目下の基体説は構成要素関係を持ち出すことなく、端的に「個物  $x$  が性質  $P$  を例化するのは、 $x$  の基体が  $P$  を担うおかげである」と主張できるからである。しかし、モアランドをはじめとする支持者たちが実際に(2)を明確に支持している以上、目下の基体説が構成的存在論から本当に逸脱しているかは定かではない。彼らに好意的に解釈するならば、たとえば基礎づけ関係を推移的と仮定し、「個物  $x$  が性質  $P$  を例化するのは  $x$  が  $P$  を構成要素とするおかげであり、 $x$  が  $P$  を構成要素とするのは  $x$  の基体が  $P$  を担うおかげである」と考えることができる。このとき、(2)は性質例化と「担う」関係の間を橋渡すため余剰ではない。そして(2)が必要とされるなら、例化を原初的とせずに構成要素関係で説明できるという構成的存在論の利点も維持される。あるいは、(2)の基礎づけを部分的基礎づけ (partial grounding) とみなして、「個物  $x$  が性質  $P$  を例化するのは、 $x$  が  $P$  を構成要素とし、 $x$  の基体が  $P$  を担うおかげである」と考えることもできる。こちらは(2)に若干の修正を加える形ではあるが、どちらにしても(2\*)は(2)から逸脱しておらず、実際の支持者たちも(2\*)が構成的存在論の枠組みの中で成立すると考えている。したがって、現代の基体説の標準装備は——たしかに(2)の必要性や重要性を霞ませてしまう可能性があるものの——構成的存在論の一部として理解できるように我々には思われる。

## 5.2 混み合いの問題と述定の多元化

ベイリー (Bailey 2012) は現代的な基体説にかかる「混み合い (crowding) の問題」を指摘した。この問題は次のように整理できる。いま我々の目の前に赤いトマトがあるとしよう。性質例化の区別を設ける基体説は、これを次のように説明する。トマトという個物がトマト性などの性質を所有するのは、トマトの基体がトマト性を担うおかげである、と。ここで注目したいのは、個物と基体は赤さや丸さやトマト性などのまったく同じ性質を持っていることだ。だとすればいま我々の目の前には、赤さや丸さやトマト性を持つもの、つまりまぎれもなくトマトそのものが二つあることになる。だがこれは明らかにおかしい。目の前には当然ひとつのトマトしかないからである。

この問題を、性質帰属を行う「である」の述定的機能という観点からまとめ直してみよう。ベイリーは、ある個物が性質  $P$  を所有し、それゆえその個物の基体が  $P$  を担っているとき、基体と個物はどちらも「 $P$  である」はずだと主張している。そしてこの「である」が述定の意味である限り、基体と個物双方に性質帰属が行われているのだから、 $P$  であるようなものは二つできてしまう。つまり二種類の例化を認める基体説にしたがうと、個物がある場所には、その個物の性質とまったく同じ性質を持つものがもうひとつできてしまう。このような重なり合わせの世界、混み合った世界はまったく馬鹿げている。したがって、基体説を受け入れるべきではない。

しかしこうした批判は、基体説の性質例化の区別の無理解に基づいているかもしれない (cf. Wildman 2015; Perović 2017: 289)。針山と針のアナロジーを思い出そう。緑の針山に赤い針が刺されたからといって、針山が赤になるわけではない。それと同様に、トマトの基体がトマト性を担うからといって、基体がトマトになるわけではない。ワイルドマン (Wildman 2015: 1427–9) はこうした着想を精緻化し、性質例化の仕方が「担う」と「所有する」に分かれるのであれば、述定を表す「である」の意味も当然二つに分けられるだろうと主張している。いわく、「異なる例化関係には異なる意味を持つ述定が対応して存在する、つまり「持つ」という各々の意味に結び付くような異なる意味の「である」が存在するというのもっともだと思われる」(Ibid.: 1428)。言い換えれば、担う関係を示す「である bearing」と所有する関係を示す「である possessing」は明確に区別される。だとすれば、実際には「基体はトマトである bearing」と「個物はトマトである possessing」は二つの異なる「である」なのだから、両者を一緒くたにして「基体と個物双方がトマトである」と論じることは、単に多義性の誤謬を犯しているにすぎない。この多元的述定 (multi-predication) による応答は、ある性質を「持つ」ことの意味を多元化する現代的な基体説の自然な着地点に見える。

では、この多元的述定の戦略はどれほど見込みがあるだろうか。興味深いことに、「である」が複数の意味を持っていることはこれまでも様々な仕方で論じられてきた。たとえば、「彼女は学生である」に含まれる「である」と「キケロはタリーである」に含まれる「である」は、しばしば異なる意味を持っていると解釈される。前者は「彼女」という主語に「学生」という性質を帰属させる述定的な言明であるが、後者は「キケロ」と「タリー」の指示対象が同一であることを述べる同一性言明である。また、一部の形而上学者が果敢にも主張してきたように、「である」にはいわゆる物質的構成 (material constitution) を表す意味もあるかもしれない (Wiggins 1980: 30–5; Baker 2000: 54)。

いま、ダビデ像の材料である大理石の塊を「ランプル」と名付けたとしよう。このとき物質的構成を支持する論者は、像に属するダビデ像と大理石の塊に属するランプルは種性質などを異にするために数的に同一ではないが、何らかの仕方で結び付いている、すなわち物質的構成の関係にあると主張する。こうした形而上学的な枠組みでは、「ダビデ像はランプルである」という文に含まれる「である」は、「キケロはタリーである」とは違って同一性を表しえない——物質的構成は数的同一性から厳密に区別されるからである。代わりに問題の文は、ダビデ像はランプルによって物質的に構成されることを表すという仕方で理解される。つまり問題の「である」は、性質帰属とも数的同一性とも異なる、物質的構成という新たな意味を持っているのである。こうすれば、ダビデ像とランプルの数的同一性を否定しながらも「ダビデ像はランプルである」が真であることを否定せずに済む。基体説による述定の多元化は、こうした戦略と類比的な仕方で「である」に新たな意味を付け足していると解釈できる。

しかしながら、物質的構成を表す「である」が少なからぬ批判を招いてきたように (cf. Pickel 2010: 199–201)、述定の多元化にも疑惑の目が向けられるはずである。例として、「ダビデ像はランプルであるが、ランプルではない」という文を考えよう。いま「である」が多義的だとすると、この文は「今日アメ（雨）が降るが、アメ（飴）は降らない」と同じように、矛盾を回避した読みを持つはずである。しかしこの文は明らかに矛盾した響きを持つだろう。つまり、前者の「である」は物質的構成を表し、後者の「ではない」は数的同一性の否定を表すという解釈はおおよそ成立しそうにない。この点で物質的構成の「である」に頼る戦略は、「である」の意味を無理に捻じ曲げている可能性がある。同様の懸念は、特定の個物  $a$  についての文「 $a$  はトマトであるが、トマトではない」という文にも当てはまる。多元的述定の戦略にしたがえばこの文は、前者の「である」は所有するという意味、後者の「ではない」は担うことの否定という意味で多義的に解釈できるはずである。しかしそうした解釈はやはり成立しそうになく、問題の文は端的な矛盾として扱われるだろう。これは、担うという意味の「である」が我々の自然言語に存在しないことを裏付けるひとつの証左である。

だとすると、述定を二つの意味に分ける戦略は想像されるよりも問題含みだと言ってよいだろう。少なくとも「である」の内に、所有するとは別に担うという意味を忍び込ませる意味論はあまりにも人工的でアドホックである。多元的述定の戦略は、たしかに基体説が混み合いの問題を解決する際の助けとなるが、その大きな代償として、自然言語の意味論に小さくない負担を強いてしまうのである。

### 5.3 個物としての基体に頼る応答

混み合いの問題の新たな解決策として、近年コノリーは、例化の区別を利用しないタイプの基体説を提案した (Connolly 2015)。混み合いの問題の根は、ある個物が性質を所有することと、その個物の基体が性質を担うことが共に成立することにあった。だからこそ、同じ性質を持つものが二つできてしまう。コノリーはこれらの事実の同時成立をブロックするために、個物と基体は同一だと主張する。彼は、「個物が性質を所有するのはその基体が性質を担うおかげである」という現代の基体説の根幹的テーゼを放棄する。基体と同一視される個物はいまや、構成要素関係ではない仕方で——ここでの整理では「担う」仕方で——性質を例化する。このような描像では、個物と基体は同じものであ



るから、ベイリーが問題視したような別個で同性質の対象はどこにもない。また基体は性質を構成要素として持つわけではないから、基体の内に下部構造ができることもなく、上で見たような無限後退の問題も発生しない。もちろん、性質例化の仕方ひとつであるから、「である」の意味が分かれたりもしない。

我々が見るところ、コノリーの戦略は、基体説に対して投げかけられるその他の疑問にも一応の応答を与えることができる。中でも、個物の個別化因子として基体を措定することは個物の同一性／差異性を原初的とする戦略よりも本当に有意義な説明を与えているのかという疑問は、基体説が応答せねばならない問題のひとつとされてきた。オダーバーグが指摘するように、基体は「仮にそれが個別化の役割を果たすとしても、基礎づけられていない同一性以上の働きをするわけではない」(Oderberg 2005: 205) ように見える。また、性質の針山となるという基体の役割も、詳しい説明を与えない限り、説明力の点では個物が性質の針山となることとそれほど変わらないとすら言える(Magalhães 2015: 105)。しかしコノリーの枠組みでは、こうした批判は真正面から対峙する必要のないものだ。なぜならば、基体と個物が同一視される時、基体が個物の個別化因子で性質の針山となることは、個物が原初的で基礎づけられない同一性を持つこと、そして個物が性質の針山の役割を果たすことに相当するからである。つまり彼の戦略は、基体と個物の違いをめぐって提起されてきた問題を周到に回避できる。

しかしながらコノリーの戦略では、基体説によって解決可能であったはずのブラックの宇宙が再び脅威として立ち塞がるだろう。コノリーは「実体／基体はそれ自身を個別化する」(Connolly 2015: 1360) と認める。だがこれは結局のところ、例化物を持ち出す戦略がそうだったように、個物の同一性を原初的とみなすに等しく、同じ普遍者を持つ二つの鉄球がなぜ同一でないかという問いに答えることができている。これでは個物の個別化因子として基体を措定することの意義が失われ、基体説を一步後退させてしまうだろう。本来の基体説では、カストルとポルックスが同一でないことは、それらの個別化因子である基体が数的に異なっていることから説明されるはずだからである。

またコノリーの戦略は、基体説を擁護するために構成的存在論を放棄するものであり、関係的存在論のひとつとみなされるべきである。基体と個物を同一視する立場はもはや、基体を構成要素とみなす基体説ではなく、(使う用語が少々異なるだけの) 関係的存在論であるとみなすのが自然だ。実際、コノリー自身もそのことを受け入れ、自らの理論が反構成的存在論となることを認めている。それどころか、基体説は「構成的存在論を採用する必要がないし、そうすべきではない」(Ibid.: 1356) と積極的に表明している<sup>\*31</sup>。しかしこれは、個物による性質例化に対し形而上学的な説明を与えることを事実上放棄しているに等しく、基体の措定に伴う大きな利点をひとつ失うことを意味する。さらに我々は多くの論者にならって基体説が構成的存在論の傘下にあると考える。そのため、コノリーの理論は、「基体」を新たな仕方で理解することを促すものでこそあれ、基体説の維持にはまったく貢献

<sup>\*31</sup> 構成的存在論を捨ててまでコノリーが「基体説」というラベリングにこだわるのは、彼が関係的存在論(的な立場)を実体存在論(substance ontology)と呼び、それが「虎性のような実体種を基礎的だと捉え、個別の実体が基礎であることを否定する」(Connolly 2015: 1358) 見解だとみなした上で、基体説は個物が例化可能な性質に制限を設けずに済む立場だと考え、後者に共感しているからだ(Ibid.: 1364)。つまり彼は反本質主義に共感しており、ゆえにそれと両立可能な唯一の理論としての基体説を擁護していた。しかし我々の考えでは、関係的存在論と(種的な)本質主義の間や、基体説と反本質主義の間に、直接的な含意関係は(どちら向きにも)ない。

できていないと結論づけねばならない\*32。

#### 5.4 本質の問題

現代的な基体説が抱える問題は、混み合いの問題だけではない。デイヴィス (Davis 2004) は基体説に対して次のような批判を展開した。デイヴィスはまず、ソクラテス  $S$  とソクラテスの基体  $B(S)$  の間に構成要素関係が成り立つとして、それは偶然的関係か本質的關係かどちらなのかと問う。仮にそれが偶然的関係であるならば、 $S$  と  $B(S)$  が共に存在しているにもかかわらず、 $B(S)$  が  $S$  から離れて存在する可能世界が認められる。しかし当然、 $B(S)$  が何らかの個物の内になく自立することも、 $S$  以外の対象の構成要素となることもありえない。それゆえこの関係は本質的關係でなければならない。すなわち、 $B(S)$  が存在するすべての可能世界で  $B(S)$  は  $S$  の構成要素であり、かつ  $S$  が存在するすべての可能世界で  $S$  は  $B(S)$  を構成要素に含む。 $S$  と  $B(S)$  の間のこうした関係を担保するにあたってデイヴィスは、 $B(S)$  が「 $S$  の個別化因子である」という性質を本質として持たねばならないと主張する。だがそうすると、 $B(S)$  はその性質を構成要素として持つことになるため、基体説は次のような困難に陥る。「 $S$  の個別化因子である」という性質は明らかに  $S$  自身をその内に含んでおり、しかるに  $S$  を構成要素とするように見える。さて、構成要素関係は推移的であるだろうから、 $S$  が  $B(S)$  を、 $B(S)$  が「 $S$  の個別化因子である」という性質を、最後にこの性質が  $S$  を構成要素とするならば、 $S$  は  $S$  自身を構成要素とする。すなわちソクラテスはソクラテスを構成要素とする。これは基体説にとって不都合な帰結である。なぜならば、一般に基体説では基体を含む構成要素は個物を個別化する役割を担うため (cf. Moreland 2000: 47)、 $S$  を個別化する構成要素である  $S$  もまた—— $S$  が  $S$  自身を構成要素とする限り——さらに下位の構成要素たる  $S$  自身によって個別化されねばならず、この個別化の連鎖は無限に続いてしまうからである。こうした事態は、個物の個別化自体を毀損しかねない。

デイヴィスが提起した問題は、「基体はいかにして自らの本質を持ちうるか」という一般的な問題——これを「本質の問題」と呼ぼう——の派生形として理解できる。これは、「個別者である」とか「単純物である」とか「性質の担い手である」といった性質はすべて基体の本質的特徴であるが、しかし基体はこれらをいかなる仕方でも持ちえないという問題である (cf. Mertz 2003: 18–9; Loux 2015: 18–9)。一方で、基体はこれらの性質を担っていない。というのも、たとえば  $B(S)$  が「単純物である」といった性質を担うなら、この性質は ( $S$  は単純物ではないにもかかわらず)  $S$  が所有することとなり、 $B(S)$  の本質的性質ではなくなってしまうからだ。しかし他方で、基体はこれらの性質を構成要素とすることもできない。これは基体の下部構造として「基体の基体」を認めることに直結してしまうだろう。

\*32 構成的存在論から距離をとる基体説の中には、個物それ自体のあり方を見直すものもある (Paolini Paoletti 2021)。これによると、個物は基体（と本質的性質）にその同一性が依存するような、ある種のトロープである。たとえば、ソクラテスという個物は「問題の基体による人間であること」という特定のトロープに相当する。よって、個物と基体との関係が存在論的依存の一種である同一性依存によって分析される限り、個物にはもはや複数の構成要素から成る全体である必要はなく、基体も個物の構成要素である必要はない。パオリニ＝パオレッティは、こうしたタイプの基体説は混み合いの問題（および次節で見る本質の問題）を回避できると論じているが、それについては別途検証が必要だろう。

このような問題に対して、基体説は従来次のように応答してきた。モアランドとピカヴァンスは、たとえば複現不可能性や個別者であることなどの基体に結びつけられる本質的性質は、そもそも性質ではないと主張する (Moreland and Pickavance 2003: 10)。彼らによるとそうした性質は、複現可能であるなどの真なる性質の欠如にすぎないか、あるいは形式存在論 (formal ontology) 上のカテゴリーにほかならず、いずれも真なる意味では「性質」ではない。したがって基体は、「個別者である」といった特徴づけをそれと対応する性質を持つことなく与えられている。以下では、ロウの用語法にならって、基体が有するこうした定義的性格を、「性質」と区別して基体の「アスペクト」と呼ぶことにしたい (Lowe 2003: 86)。すなわち、「個別者である」とか「単純物である」とか「性質の担い手である」といったものはすべて基体の性質ではなくアスペクトである。

こうした戦略を、デイヴィスによって装いを新たにされた本質の問題に対する解決策として練り直せるかもしれない。「 $S$ の個別化因子である」というのは実は性質ではなく、それゆえ、 $B(S)$ はこうした特徴をアスペクトとして与えられているだけだ、と。このように考えると、 $B(S)$ は何も構成要素としていないから、その内にさらなる下部構造など生じないし、上で見たような「ソクラテスがソクラテス自身を構成要素とする」といった奇妙な事態も当然生じない<sup>\*33</sup>。

しかしながら、「 $S$ の個別化因子である」という特徴は $B(S)$ にしか当てはまらない以上、これを「個別者である」といった他の基体一般のアスペクトと同じように扱ってよいかどうかに不安は残る。もちろん、あらゆる基体が「自らを構成要素とするような個物を個別化する」といったアスペクトを持つと考えることはそれほど難しくない。これは基体一般の特徴だからである。しかしこうしたアスペクトの存在からは、デイヴィスが問題視したような、 $S$ と $B(S)$ が共に存在していながら $B(S)$ が他の個物の内にありそれを個別化してしまう世界を排除できない。当世界において $B(S)$ はきっちりと、自らを構成要素とする個物の個別化因子となっているからである。このことから我々は、 $B(S)$ はやはりほかならぬ $S$ の個別化因子であるというアスペクトを持たねばならないとわかる。問題は、そのことがいかにして正当化されるかにある。

ペロヴィッチ (Perović 2017) はデイヴィスの議論を念頭に置いた上で、 $S$ から遊離して存在してしまうような $B(S)$ 、すなわち「様相的に自由な (modally free)」(Ibid.: 291) 基体をブロックするためには、基体が「構成的に性質を持たないにもかかわらず、すべて質的に異なっており、まさにそのような説明不要の質的差異のおかげで日常的なモノを個別化できる」(Ibid.: 292) 必要があると述べている。ここで述べられている基体の質的差異とは、たとえば $B(S)$ はかならず $S$ だけを個別化し、プラトンの基体はかならずプラトンだけを個別化するという、各々の基体の役割についての (説明

\*33 デイヴィスに対しては別の応答も可能かもしれない (この点は匿名の査読者の指摘による)。一般に、個物 $x$ は「 $x$ の非真部分である」などの性質を持つと考えられる。このような性質は、 $x$ 自身を構成要素に含むいわゆる不純な性質である。そして (基体説に限らず) 構成的存在論一般を前提とするとき、こうした性質も個物の構成要素となる。しかしそうすると、構成要素関係の推移性により $x$ は $x$ 自身の構成要素となってしまう。もちろん構成要素関係が部分関係と類比的に反射的だと仮定できれば、反射性そのものがデイヴィスへの反論となる (個物自身という構成要素は基体と違って個別化に貢献する必要はないと考えればよい)。しかしデイヴィスにしたがって非反射的な構成要素関係を想定する場合には、構成的存在論は不純な性質の存在を認めるだけで矛盾が導かれ瓦解してしまう。この問題を避けるひとつの方法は、構成要素関係の推移性を否定することだが、そうするとその推移性を前提に置くデイヴィスの議論は成立しなくなるだろう。よって、問題の推移性を否定することは基体説にとって有望な選択肢のひとつである。

不要の) 違いである。つまりペロヴィッチは、本質の問題に対していま我々が考慮しているのと同様の解決策を考慮している。しかしその上で彼女は、このような基体の「説明不要の違い」を認めるぐらいなら、個物それ自体の「説明不要の(数的な)違い」をはじめから受け入れた方がいくらか混乱が少ないと結論づけている。

こうしたペロヴィッチの結論はある程度もっともだと我々は考える。もういちどデイヴィスの議論を振り返ると、彼は  $S$  と  $B(S)$  を区別することからはじめていたが、そもそもその区別が問題の原因だったという可能性は排除できない。もし  $B(S)$  が自らを含んだ個物を何であれ  $S$  にするるのであれば、 $B(S)$  から独立した  $S$  の存在を考えることにほとんど意味はないだろう。しかしこのように問題の基体のアスペクトを特定の個物の内実へと接近させていくほど、やがて「基体と個物を分ける必要は果たしてあるのか」という疑念にぶち当たるはずだ。混み合いの問題を通じてコノリーが見出した「基体」概念の困難に、ペロヴィッチは本質の問題を通じてたどり着いたと言える<sup>\*34</sup>。

## 5.5 超実体説

論争はやや混迷の状況にある。最後に混み合いの問題や本質の問題を一挙に解決するかもしれない別方面からの議論を検討することにしよう。それはサイダー (Sider 2006) が基体説の進むべき先としてポジティブに示し、またモルガンティ (Morganti 2011) が基体説の必然的な帰結としてややネガティブに示した、「時空領域(ないし時空点)を基体とみなす」という立場である。これは一般に超実体説 (super-substantivalism) と呼ばれる。

超実体説にもさまざまなバリエーションがあるが、ここではシャフアー (Schaffer 2009) に代表される時空領域と個物を同一視する同一説 (identity view) と、レムクル (Lehmkuhl 2018) に代表される時空領域から個物が構成されるとする構成説 (constitution view) の区別が重要である。構成説においては、時空領域と個物は数的に異なる別の種類の存在者だとみなされる。だとすれば、有望な基体説を見定めるという目下の目的に照らせば、魅力的なのは同一説の方だろう。なぜなら、時空領域という基体と個物が構成要素関係にあるのだとすれば、やはりそれらは「同じ性質を持つ別々の存在者」になり混み合いの問題が再燃するからである<sup>\*35</sup>。これに対して、基体とは時空領域にほかならず、かつ時空領域が個物と同一だとすれば、コノリーの戦略と同様に混み合いの問題は発生しない。このタイプの基体説も、やはり構成的存在論から逸脱しているが、基体は何であるかをよりはっきりと示している点でコノリーの戦略よりもいくぶん洗練されている。

次に本質の問題。まず、「個別的である」といった特徴は各々の時空領域の定義的性格だと考えられ

\*34 デイヴィスは近年の Davis 2013 においても、 $S$  と  $B(S)$  の間に成り立つ構成要素関係が偶然的にならないのはなぜかを問うている。ただし、問題設定は一貫していても基体説批判の手つきは変化している。本稿でまとめたように、Davis 2004 は構成要素関係の推移性に頼っていた。それに対して Davis 2013 は、 $B(S)$  がかならず  $S$  の構成要素となる本性を持つとすれば、基体説は説明的な循環ないし袋小路に陥ると述べている (Davis 2013: 405)。近年の形而上学の潮流の中で、彼の批判の力点は構成要素関係の循環から説明の困難へと移ったのだろう。

\*35 なお、本稿が (Sider 2006 の主張に反して) 時空点ではなく時空領域を基体とみなしているのは、仮に時空点で基体であるとすれば、この立場はかならず構成説的な超実体説となるからである。というのも、基体が時空点で、時空点の集まりとしての時空領域こそが個物だとすると、基体と個物はいわば部分と全体の関係にあることになり、同じ普遍者を持つ基体と個物はやはり数的に異なってしまう(それゆえ混み合いの問題が生じる)からである。

る。少なくともこれまで検討してきた「裸の個物」よりは、それが自然に受け入れられる。さらにデイヴィスが指摘した問題は次のように解決される。彼の批判は、ある特定の個物が諸可能世界を通じて同一の基体によって個別化されること——つまり基体をもたらず個物の貫世界同一性 (transworld identity)——を前提としている。ソクラテスとその基体が離れて存在する可能性は、その前提と反するため認められなかったのだ。しかし超実体説は通常、そもそも個物の貫世界同一性を認めない。というより、「この空間領域が(自分自身と同一であるままに) あそこにあったかもしれない」といった言明は理解に苦しむので、認められない<sup>\*36</sup>。したがって、時空領域と個物(と目される色や生体機能などの性質の集まり)の関係は明らかに偶然的関係となるが、それで問題は生じない。各々の個物は、それらが住む可能世界の中の時空領域によって個別化されるだけである<sup>\*37</sup>。

## 6 まとめ

これまで我々は、束理論と基体説の近年の展開を見てきたが、最後に大局的な視点からその「現在地」を総括することで本稿を閉じることにしたい。

まず、普遍者の束理論が依然として抱えている最も厄介な問題は、やはりブラックの宇宙だと言ってよいだろう。二つの鉄球があることを最初から否定するの でなければ、あらゆる束論者は完全に不可識別な二つの鉄球に対し何らかの説明を用意せねばならない。しかし現代の束理論は——例化物説であれメレオロジー的束理論であれ——十全な応答を用意できているとは言いがたい。それは結局、鉄球を例化物または質的な融合体と同一視した上でその数的差異性を原初的なものとせざるをえないか、もしくは鉄球の「構成要素」から数的差異性を説明するために鉄球どうしの原初的な位置関係・性質を利用するほかない。これらの提案がブラックの宇宙という最大の困難に対しどれほど有効性を持つかは、たしかに綿密な検討を要する。しかし、個物の原初主義との比較や循環性の疑惑に照らして考えると、少なくともどちらもあらゆる問題を免れているほど安全な解決策というわけではない。

これとよく似た評価は、基体説にも当てはまる。基体が性質をいっさい持たないという意味で「裸」であることを甘んじて受け入れるのでなければ、混み合いの問題は基体説に避けがたく突き付けられる問題である。そこで現代の基体説がこれまでに提案してきたのは次のような対処法である。すなわち、個物と基体の性質の「持ち方」の区別に合わせて述定の意味すらも多元化するか、あるいは基体を個物や時空領域と同一視することだ。だが、述定の意味を歪曲している、もしくは構成的存在論か

<sup>\*36</sup> とはいえ、「この空間領域があそこにあったかもしれない」という言明が理解に苦しむとしても、「ここにいる犬のポチがあそこにいたかもしれない」という言明は明らかに正しいため、時空領域と個物を同一視する超実体説がこの緊張関係をどう解きほぐすかは問題となる (cf. Skow 2005: 69)。主流の解決策は、様相についての対応者理論を採用することである (cf. Sider 2001: 111–2; Schaffer 2009: 145)。それによれば、ポチの占める時空領域に関心が払われた文脈ではここにポチがいることが必然的になる一方、ポチの色や生体機能に関心が払われた文脈ではそれが他の時空領域に分布したかもしれないので、ここにポチがいることは偶然的になる。つまりは、時空領域と同一視された個物の事象様相を考えると、それと似て選出される対応者は文脈によって変化する。なお主流ではない解決策として、質量と時空は切り離せないという一般相対性理論の教えを推し進め、質量の移動によって時空領域もある意味で移動するという考えもある (Skow 2005: 70)。

<sup>\*37</sup> ここでの議論から見て取れるように、超実体説でなくとも貫世界同一性を認めない基体説にはデイヴィスの批判が刺さらない。また、個別化の原理が可能世界によって異なるという Dumsday 2020 のラディカルな見解も、デイヴィスへの応答案のひとつとして読めるだろう。

ら多かれ少なかれ逸脱しているという嫌疑がかけられる限り、どの選択肢も基体説の支持者が手放しに受け入れられる方策とは言いがたいだろう。

以上の問題にもかかわらず、束理論と基体説の新たな展開は意義深いものだと我々は考える。このことを示す例証として、両理論の間に横たわる象徴的な違いが一部の対立を通じてよりはっきりとしてきたことが挙げられる。我々が見るところ、現段階で最も有望な両理論の姿はおそらく、弱い識別可能性を用いる束理論と超実体説である。そして興味深いことに、これらの理論は「時空」についての両理論の捉え方の相違を反映するものとなっている。前者は空間に関する抽象的な普遍者を基礎的な存在者として据えるのに対し、後者は時空領域という具体的な基体を基礎的な存在者（のひとつ）に据える。こうした時空観の違いは、時空が個物の個別化にとって重要な役割を担うという可能性に考えを巡らせればけっして偶然ではないだろう。しかし最終的に行き着く先のひとつが時空をどのように捉えるべきかという論点であることは、現代の束理論と基体説が見せる奥行きのひとつとして特筆しておくべきである<sup>\*38</sup>。

それでもなお、現代の束理論および基体説による一連の動きは、「進歩」から程遠いと見る向きもあるかもしれない。たしかにこんにちの両理論は、主要な問題の解決策を提示するための代償として別の問題を惹起させるだけでなく、形而上学上のガジェットを少なからず増加させてしまう。束理論で新たに導入された「例化物」や「質的な融合体」、基体説で導入された「担いと所有の区別」や「時空領域としての基体」はその一例である。しかしながら我々の考えでは、近年における新しい問題提起やガジェットの増加はむしろ、各理論内部の多様性が花開く途上であることの証左として理解する方が有意義である。一口に「束理論」や「基体説」と言っても、第3節で見た従来の姿とは違い、それぞれの支持者が展開する形而上学的世界観の間にはいまや大きな隔たりがある。たとえば、どのような存在者が束ないし個物の個別化因子となるかについて、新しい束理論には——例化物や質的な融合体、位置的性質などを思い浮かべればわかるように——様々な選択肢が広がっている。同様の広がりには、「基体」とは具体的にいかなる存在者であるかという論点についても当てはまるだろう。仮にとある束理論もしくは基体説に致命的な誤りが見つかったとしても、そのことは他の諸理論を退けるのに十分ではないどころか、それらを補強する材料にすらなるかもしれない。新たな束理論と基体説が続々と登場していることは、それらが今後さらなる多様性を伴って発展し洗練されていく可能性を予感させるものである。そうしたことから、本稿が光を当ててきた新展開は、依然問題含みとはいえず、個物と性質をめぐる形而上学を前に進めるための確かな一歩だと言えるだろう。

\*38 さらに補足すると、超実体説と弱い識別可能性を用いる戦略は時空の捉え方が異なるものの、どちらも関係項に対する関係の先行性を説く構造主義 (structuralism) とは親和的かもしれない。まず前者について、シュミット (Schmidt 2008) はサイダーの基体説を構造主義へと結び付ける。彼によれば、時空点としての基体は、内在的な性質あるいはこの性 (haecceity) に基づく同一性基準を持つのではなく、計量テンソルによって与えられる外在的關係を含むような時空構造・ネットワークに基づく構造主義的な同一性基準を持つ。こうした診断は、サイダー自身が時空点について、「部分を持たず、時空的關係のネットワークに立つような真なる裸の個物」(Sider 2006: 10) と述べていることから一定の妥当性を持つと言える。次に後者について言えば、弱い識別可能性の代表的な擁護論文である Saunders 2006 がフレンチとクラウゼ (French and Krause 2006: 172) やレディマン (Ladyman 2016) によって構造主義的に読み解かれていることにくわえて、サンダーズ自身が「私ははっきりと存在論的構造主義者を自認するつもりだ」(Saunders 2003: 129) と述べている。

## 謝辞

本稿に対して適切なコメントをくださった、二名の匿名の査読者の方々に謝意申し上げる。なお著者のひとり（横路）は、本研究を遂行するにあたって JSPS 科研費（JP20J00631）の助成を受けた。

## 参考文献

- Adams, R. 1979, “Primitive Thisness and Primitive Identity”, *Journal of Philosophy* 76(1): 5–26.
- 秋葉剛史 2014 「個物」、鈴木生郎・秋葉剛史・谷川卓・倉田剛『現代形而上学：分析哲学が問う、人・因果・存在の謎』所収、170–194、新曜社。
- Allaire, E. B. 1963, “Bare Particulars”, *Philosophical Studies* 14(1/2): 1–8.
- 1965, “Another Look at Bare Particulars”, *Philosophical Studies* 16(1/2): 16–21.
- 1967, “Things, Relations and Identity”, *Philosophy of Science* 34(3): 260–272.
- Alston, W. P. 1954, “Particulars—Bare and Qualified”, *Philosophy and Phenomenological Research* 15(2): 253–258.
- Armstrong, D. M. 1989, *Universals: An Opinionated Introduction*, Boulder, CO: Westview Press. (『現代普遍論争入門』、秋葉剛史訳、春秋社、2013年)
- 1997, *A World of States of Affairs*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Bailey, A. M. 2012, “No Bare Particulars”, *Philosophical Studies* 158(1): 31–41.
- Baker, R. 1967, “Particulars: Bare, Naked, and Nude”, *Noûs* 1(2): 211–212.
- Baker, L. R. 2000, *Persons and Bodies: A Constitution View*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Barker, S. and Jago, M. 2018, “Material Objects and Essential Bundle Theory”, *Philosophical Studies* 175, 2969–2986.
- Benocci, M. 2018, “The Repeatability Argument and the Non-Extensional Bundle Theory”, *Australasian Journal of Philosophy* 96(3): 432–446.
- Benovsky, J. 2008, “The Bundle Theory and the Substratum Theory: Deadly Enemies or Twin Brothers?”, *Philosophical Studies* 141(2): 175–190.
- Bergmann, G. 1967, *Realism: A Critique of Brentano and Meinong*, Madison, WI: University of Wisconsin Press.
- Black, M. 1952, “The Identity of Indiscernibles”, *Mind* 61(242): 153–164.
- Brower, J. 2014, *Aquinas’s Ontology of the Material World: Change, Hylomorphism, and Material Objects*, Oxford: Oxford University Press.
- Campbell, K. 1990, *Abstract Particulars*, Oxford: Blackwell.

- Castañeda, H.-N. 1974, “Thinking and the Structure of the World”, *Philosophia* 4(1): 3–40.
- Casullo, A. 1988, “A Fourth Version of the Bundle Theory”, *Philosophical Studies* 54(1): 125–139.
- Connolly, N. 2015, “Yes: Bare Particulars!”, *Philosophical Studies* 172(5): 1355–1370.
- Curtis, B. L. 2014, “The Rumble in the Bundle”, *Noûs* 48(2): 298–313.
- Davis, R. B. 2004, “The Brave New Bare Particularism”, *Modern Schoolman* 81(4): 267–73.
- 2013, “Are Bare Particulars Constituents?” *Acta Analytica* 28(4): 395–410.
- Demirli, S. 2010, “Indiscernibility and Bundles in a Structure”, *Philosophical Studies* 151(1): 1–18.
- Dieks, D. and Versteegh, M. A. M. 2008, “Identical Quantum Particles and Weak Discernibility”, *Foundations of Physics*, 38(10): 923–934.
- Dummsday, T. 2020, “How to Be a Pluralist in Substance Ontology”, *Erkenntnis* 85(4): 995–1022.
- 2021, “Can a Relational Substance Ontology Be Hylomorphic?” *Synthese*, 198(11): 2717–2734.
- Ehring, D. 2011, *Tropes: Properties, Objects, and Mental Causation*, New York: Oxford University Press.
- Fine, K. 2010, “Towards a Theory of Part”, *Journal of Philosophy* 107(11): 559–589.
- French, S. 1995, “Hacking Away at the Identity of Indiscernibles: Possible Worlds and Einstein’s Principle of Equivalence”, *Journal of Philosophy* 92(9): 455–466.
- French, S. and Krause, D. 2006, *Identity in Physics: A Historical, Philosophical, and Formal Analysis*, Oxford University Press.
- Galluzzo G. 2008, “The Problem of Universals and Its History: Some General Considerations”, *Documenti e Studi sulla Tradizione Filosofica Medievale* 19: 335–369.
- Garcia, R. K. 2014a, “Bare Particulars and Constituent Ontology”, *Acta Analytica* 29 (2): 149–159.
- 2014b, “Bundle Theory’s Black Box: Gap Challenges for the Bundle Theory of Substance”, *Philosophia* 42(1): 115–126.
- Giberman, D. 2012, “Against Zero-Dimensional Material Objects (and Other Bare Particulars)”, *Philosophical Studies* 160(2): 305–321.
- Gould, P. 2013, “How Does an Aristotelian Substance Have its Platonic Properties? Issues and Options”, *Axiomathes* 23(2): 343–364.
- Gracia, J. J. E. 1988, *Individuality: An Essay on the Foundations of Metaphysics*, Albany: State University of New York Press.
- Hacking, I. 1975, “The Identity of Indiscernibles”, *Journal of Philosophy* 72(9): 249–256.
- Hawley, K. 2009, “Identity and Indiscernibility”, *Mind* 118(469): 101–119.
- Hoffman, J. and Rosenkrantz, G. S. 1994, *Substance Among Other Categories*, Cambridge: Cambridge University Press.



- Hughs, C. 1999, “Bundle Theory from A to B”, *Mind* 108(429): 149–156.
- Keinänen, M. 2011, “Tropes—The Basic Constituents of Powerful Particulars?”, *Dialectica* 65(3): 419–450.
- Keinänen, M. and Tahko, T. E. 2019, “Bundle Theory with Kinds”, *Philosophical Quarterly* 69(277): 838–857.
- Koslicki, K. 2018, *Form, Matter, Substance*, New York: Oxford University Press.
- Kriegel, U. 2021, “The Concreteness of Objects: An Argument against Mereological Bundle Theory”, *Synthese* 199(1–2): 5107–5124.
- Ladyman, J. 2016, “The Foundations of Structuralism and the Metaphysics of Relations”, in A. Marmodoro and D. Yates eds., *The Metaphysics of Relations* (New York: Oxford University Press): 177–197.
- LaFrance, J. D. 2014, “A Bundle of Universals Theory of Material Objects”, *Philosophical Quarterly* 65(259): 202–219.
- Lehmkuhl, D. 2018, “The Metaphysics of Super-Substantivalism”, *Noûs* 52(1): 24–46.
- Lewis, D. 1986, *On the Plurality of Worlds*, Oxford: Blackwell. (『世界の複数性について』、出口康夫監訳、名古屋大学出版会、2016年)
- Loux, M. J. 2006, “Aristotle’s Constituent Ontology”, in D. Zimmerman ed., *Oxford Studies in Metaphysics*, vol. 2 (Oxford: Oxford University Press): 207–250.
- 2015, “An Exercise in Constituent Ontology”, in G. Galluzzo and M. J. Loux eds., *The Problem of Universals in Contemporary Philosophy* (Cambridge: Cambridge University Press): 9–45.
- Loux, M. J. and Crisp, T. M. 2017, *Metaphysics: A Contemporary Introduction*, 4th edition, New York: Routledge.
- Lowe, E. J. 2003, “Individuation”, in M. J. Loux and D. W. Zimmerman eds., *The Oxford Handbook of Metaphysics* (Oxford: Oxford University Press): 75–95.
- 2012, “A Neo-Aristotelian Substance Ontology: Neither Relational nor Constituent”, in T. Tahko ed., *Contemporary Aristotelian Metaphysics* (Cambridge: Cambridge University Press): 229–48. (「新アリストテレス主義的実体存在論のひとつの形——関係的でも成素的でもなく」、トゥオマス・E・タフコ編、加地大介・鈴木生郎・秋葉剛史・谷川卓・植村玄輝・北村直彰訳『アリストテレス的現代形而上学』所収、413–444、春秋社、2015年)
- Magalhães, E. 2015, “Plain Particulars”, *Grazer Philosophische Studien* 92(1): 87–108.
- Martin, C. B. 1980, “Substance Substantiated”, *Australasian Journal of Philosophy* 58(1): 3–10.
- Meiland, J. W. 1966, “Do Relations Individuate?”, *Philosophical Studies* 17(5): 65–69.
- Mertz, D. W. 2001, “Individuation and Instance Ontology”, *Australasian Journal of Philosophy* 79(1): 45–61.
- 2003, “Against Bare Particulars A Response to Moreland and Pickavance”, *Australasian Journal of Philosophy* 81(1): 14–20.

- Moreland, J. P. 1998, “Theories of Individuation: A Reconsideration of Bare Particulars”, *Pacific Philosophical Quarterly* 79(3): 251–263.
- 2000, “Issues and Options in Individuation”, *Grazer Philosophische Studien* 60(1): 31–54.
- 2013, “Exemplification and Constituent Realism: A Clarification and Defense”, *Axiomathes* 23(2): 247–259.
- Moreland, J. P. and Pickavance, T. 2003, “Bare Particulars and Individuation: Reply to Mertz”, *Australasian Journal of Philosophy* 81(1): 1–13.
- Morganti, M. 2011, “Substrata and Properties: From Bare Particulars to Supersubstantialism?”, *Metaphysica* 12(2): 183–195.
- Oaklander, L. N. and Rothstein, A. 2000, “Loux on Particulars: Bare and Concrete”, *Modern Schoolman* 78(102): 97–102.
- Oderberg, D. S. 2005, “Predicate Logic and Bare Particulars”, in D. S. Oderberg ed., *The Old New Logic: Essays on the Philosophy of Fred Sommers*, Cambridge, MA: MIT Press, 183–210.
- O’Leary-Hawthorne, J. 1995, “The Bundle Theory of Substance and the Identity of Indiscernibles”, *Analysis* 55(3): 191–196.
- O’Leary-Hawthorne, J. and Cover, J. 1998, “A World of Universals”, *Philosophical Studies* 91(3): 205–219.
- Olson, E. T. 2017, “Properties as Parts of Ordinary Objects”, in J. A. Keller ed., *Being, Freedom, and Method: Themes from the Philosophy of Peter van Inwagen* (New York: Oxford University Press): 62–79.
- Paolini Paoletti, M. 2021, “Bare Particulars, Modes, and the Varieties of Dependence”, *Erkenntnis*, <https://doi.org/10.1007/s10670-021-00417-6>
- Paul, L. A. 2002, “Logical Parts”, *Noûs* 36(4): 578–596.
- 2006, “Coincidence as Overlap”, *Noûs* 40(4): 623–659.
- 2012, “Building the World from Its Fundamental Constituents”, *Philosophical Studies* 158(2): 221–256.
- 2017, “A One Category Ontology”, in J. A. Keller ed., *Being, Freedom, and Method: Themes from the Philosophy of Peter van Inwagen* (New York: Oxford University Press): 32–61.
- Peacock, H. 2016, “Where Are Universals?”, *Metaphysica* 17(1): 43–67.
- Perović, K. 2017, “Bare Particulars Laid Bare”, *Acta Analytica* 32(3): 277–295.
- Pickavance, T. 2009, “In Defense of ‘Partially Clad’ Bare Particulars”, *Australasian Journal of Philosophy* 87(1): 155–158.
- Pickel, B. 2010, “There Is No ‘Is’ of Constitution”, *Philosophical Studies* 147(2), 193–211.
- Preston, A. 2005, “Quality Instances and the Structure of the Concrete Particular”, *Axiomathes*

15(2): 267–292.

Quine, W. V. O. 1976, “Grades of Discriminability”, *Journal of Philosophy* 73(5): 113–116.

Robb, D. 2005, “Qualitative Unity and the Bundle Theory”, *Monist* 88(4): 466–492.

Rodríguez-Pereyra, G. 2004, “The Bundle Theory Is Compatible with Distinct but Indiscernible Spheres”, *Analysis* 64(1): 72–81.

——— 2017a, “Indiscernible Universals”, *Inquiry* 60(6): 604–624.

——— 2017b, “The Arguments from Almost Indiscernibles”, *Philosophical Studies* 174(12): 3005–3020.

Rosenkrantz, G. S. 1993, *Haecceity: An Ontological Essay*, Dordrecht: Springer.

Russell, B. 1940, *An Inquiry into Meaning and Truth*, London: George Allen and Unwin.

Saunders, S. 2003, “Structural Realism, Again”, *Synthese* 136(1): 127–133.

——— 2006, “Are Quantum Particles Objects?”, *Analysis* 66(1): 52–63.

Schaffer, J. 2009, “Spacetime the One Substance”, *Philosophical Studies* 145(1): 131–148.

Schmidt, M. 2008, “On Spacetime, Points, and Bare Particulars”, *Metaphysica* 9, 69–77.

Sellars, W. 1952, “Particulars”, *Philosophy and Phenomenological Research* 13(2): 184–199.

Shiver, A. 2014, “Mereological Bundle Theory and the Identity of Indiscernibles”, *Synthese* 191(5): 901–913.

Sider, T. 2001, *Four Dimensionalism: An Ontology of Persistence and Time*, Oxford: Clarendon Press. (『四次元主義の哲学——持続と時間の存在論』、中山康雄監訳、春秋社、2007年)

——— 2006, “Bare Particulars”, *Philosophical Perspectives* 20(1): 387–397.

Simons, P. 1994, “Particulars in Particular Clothing: Three Trope Theories of Substance”, *Philosophy and Phenomenological Research* 54(3): 553–575. (「個別の衣をまとった個別者たち——実体に関する三つのトロップ説」、柏端達也・青山拓央・谷川卓編訳『現代形而上学論文集』所収、251–301、勁草書房、2006年)

Skow, B. 2005, *Once upon a Spacetime*, Doctoral Dissertation, New York University.

Swenson, P. and Rettler, B. 2019, “Bundle Theory and the Identity of Indiscernibles”, *Res Philosophica* 96(4): 495–508.

Ten Elshof, G. A. 2000, “A Defense of Moderate Haecceitism”, *Grazer Philosophische Studien* 60(1): 55–74.

Vallicella, W. F. 1997, “Bundles and Indiscernibility: A Reply to O’Leary-Hawthorne”, *Analysis* 57(1): 91–94.

van Cleve, J. 1985, “Three Version of the Bundle Theory”, *Philosophical Studies* 47(1): 95–107.

van Inwagen, P. 2011, “Relational Vs. Constituent Ontologies”, *Philosophical Perspectives* 25(1): 389–405.

——— 2016, “In Defense of Transcendent Universals”, in F. Calemi ed., *Metaphysics and Scientific Realism: Essays in Honour of David Malet Armstrong* (Berlin: De Gruyter): 51–70.

——— 2017, “Concluding Meditation”, in J. A. Keller ed., *Being, Freedom, and Method*:

*Themes from the Philosophy of Peter van Inwagen* (New York: Oxford University Press): 343–393.

Wiggins, D. 1980, *Sameness and Substance*, Oxford: Blackwell.

Wildman, N. 2015, “Load Bare-ing Particulars”, *Philosophical Studies* 172(6): 1419–1434.

Wolterstorff, N. 1970, “Bergmann’s Constituent Ontology”, *Noûs* 4(2): 109–134.

Yang, E. 2018, “Defending Constituent Ontology”, *Philosophical Studies* 175(5): 1207–1216.

Zhang, R. 2018, “A New Universal Bundle Theory”, *Philosophia* 46(2): 473–486.

Zimmerman, D. W. 1997, “Distinct Indiscernibles and the Bundle Theory”, *Mind* 106(422): 305–309.

## 著者情報

横路佳幸（日本学術振興会／南山大学 yokoro.y@keio.jp）

大畑浩志（大阪市立大学 hohata0215@gmail.com）